荒川の昔

―遊び―

はじめに

この本「荒川の昔－遊び－」は荒川の昔を知っている人、知りたい人が集まり、「荒川の昔を伝える会」としてまとめたものです。

荒川ビジターセンターが2000年に開館して以来、多くの方々から荒川での懐かしい思い出をお聞きする機会に恵まれました。どの記憶も荒川と人との関わりを伝えるもので、将来の荒川の姿、荒川とわたしたちの関わりを考える上で貴重な資料になるものです。

しかしながら、記憶は話し伝えるだけ、聞いているだけでは失われてしまうものです。そこで、「足立区の荒川の昔を体系的な資料としてまとめ、後世へ伝えていく」ことを趣旨とする「荒川の昔を伝える会」を立ち上げることにしました。趣旨に賛同して頂いた方が20人近く集まり、2004年2月8日に第1回を開催し、会の発足となりました。

多岐にわたる荒川の記憶の中から最初のテーマを「遊び」とし、記憶を整理しました。わからないことは会の中で意見交換をして疑問への回答を得たり、資料にあたって調べたりという作業を重ね、記憶を裏づけした確かなものとしていきました。

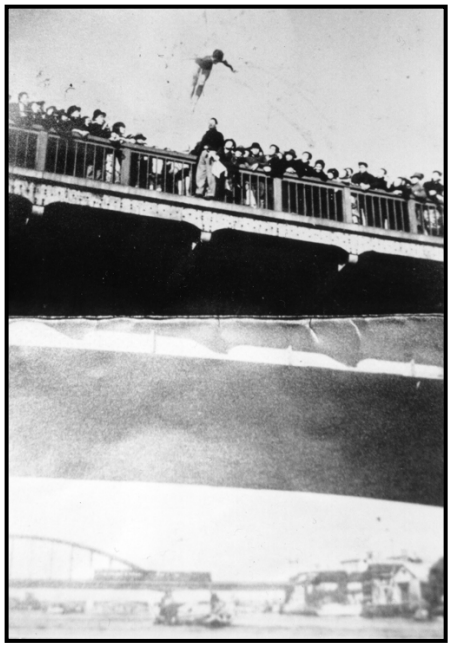
この本が 1 人でも多くの方々の目に触れ、懐かしい記憶を思い出させるものとして、また、現在の荒川の姿しか知らない子どもたちにとっては、荒川により親しみを持ち、荒川のこれからの姿を見つめるきっかけとなれば幸いです。

これからまた新しいテーマで荒川の昔を資料にし、伝えていきたいと思っております。最後になりましたが、本の作成にご協力下さいました方々に心より御礼を申し上げます。

2005年3月1日
足立区荒川ビジターセンター
解説員一同

昭和のはじめ

← 《水練場（すいれんば）》
千住新橋下流の講武館
昭和の初めは川がきれいであり、学校にプールがないので、放水路の水練場で水泳を習っている風景。
写真提供:荒木良二氏



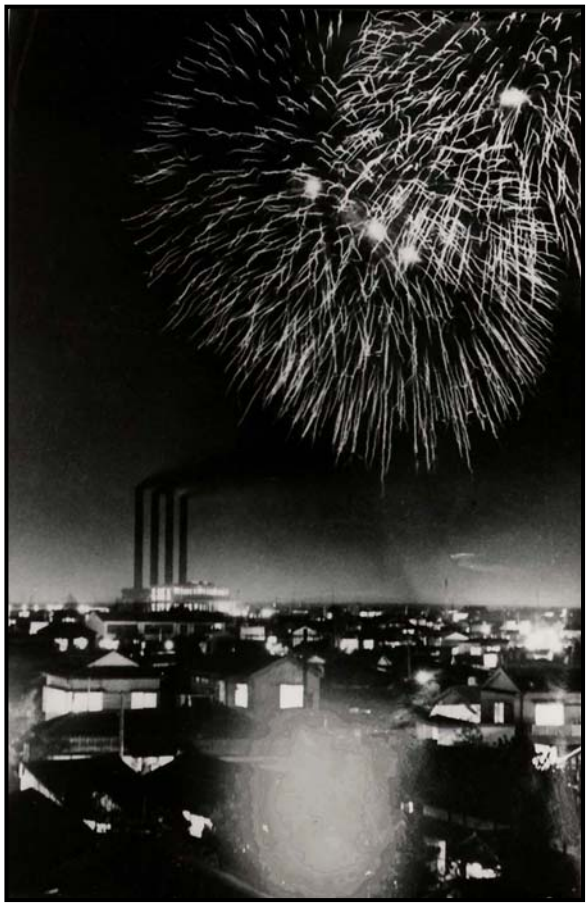
《橋からの飛び込み》→
千住新橋の真ん中から飛び込んだ。
写真提供:荒木良二氏

←
《江北
五色桜》
旧江北橋付近での花見風景の絵はがき。花見の人々でにぎわっていた。
提供:
矢沢幸一朗氏

昭和 20～30 年

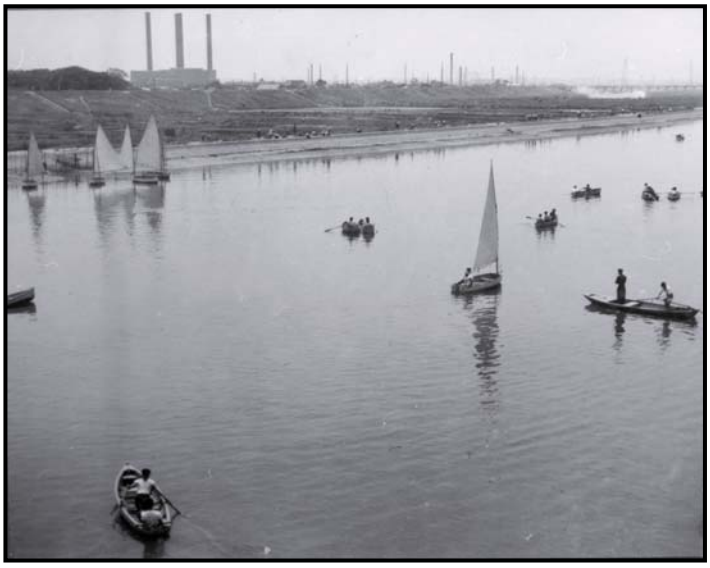
《河川敷の田んぼ》↑

昭和27、28年頃
西新井橋上流左岸
戦後もしばらくの間は、河川敷(かせんしき)の一部で、依然(いぜん)として野菜作りや米作りが行われ続けた。田んぼでは水路をせき止め、小魚をとるかいぼり遊びができた。
写真提供:石坂満(会員)



《復活した花火》

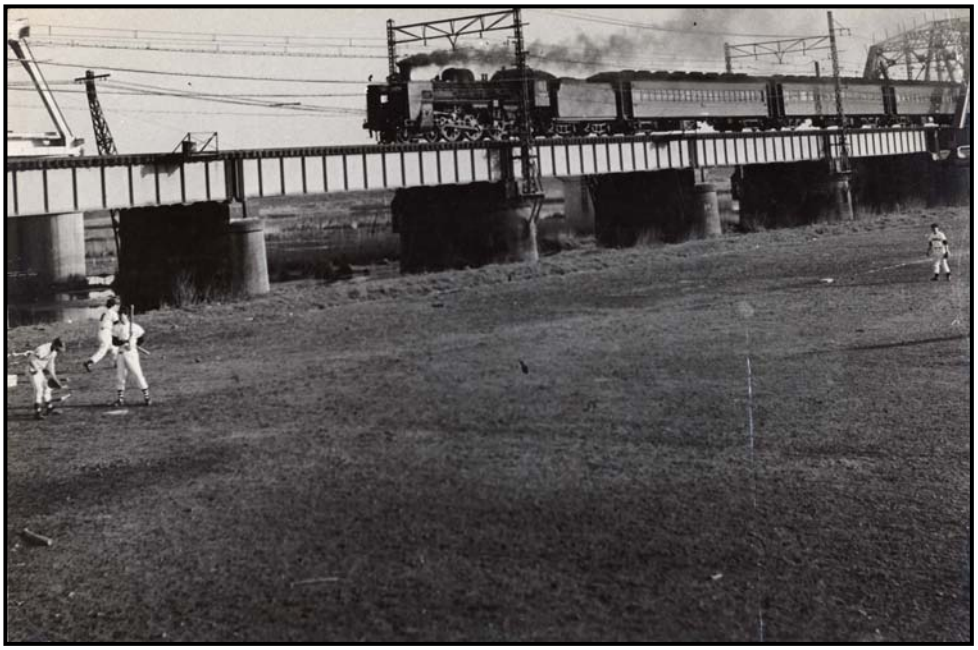
↑ 昭和29年
戦争で中断されていた夏の風物詩花火は、千住新橋と常磐線鉄橋との間で復活した。
写真提供:足立区広報課



←《ヨット遊び》

昭和20年代後半
千住新橋付近
荒川では水泳、魚とりの他にもボート遊びやヨット遊びができた。
写真提供:足立区広報課

昭和 30～40 年



↑《ＳＬ(C57)を背にして野球》

昭和30年代後半
常磐線鉄橋上流右岸
河川敷は、どんどん盛んになる野球ができる場所であった。また常磐線にも S43 年頃まで SL が走っていた。
写真提供:石坂満(会員)

↑《天然プールで魚とり》

昭和30年代　江北橋下流右岸
「四つ手」と呼んだ網を使い、荒川にいる小魚をとった。
写真提供:石坂満(会員)

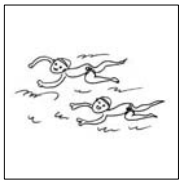
←《たこあげ》

昭和31年頃　千住新橋下流右岸
追風を受け、空高くあげた。走って風をつくりあげるカッケダコは喜ばれなかった。
写真提供:吉田千伊知(会員)

～もくじ～

はじめに・・１
写真で見る荒川・・２

（年代を表す絵です）


昭和のはじめ

20から30年

30から40年

《川遊び》

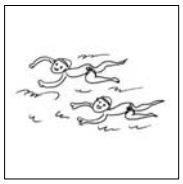
水泳・・６
釣り・・１４
かいぼり・・１７
魚とり・・２０
エビガニとり・・２１
シジミとり・・２３
ボートのり・・２５

《河川敷・土手遊び》

虫とり・・２９
草すべり・・３２
草花遊び・・３４
ヨシキリの巣さがし・・３９
たこあげ・・４０
花火・・４７
土手遊び・・５１

トピック・・５２
言葉のページ・・５８
足立区、荒川(放水路)の歴史・・５９
遊び絵地図・・６０
荒川の昔を伝える会活動の様子・・６１
参考資料・・６３

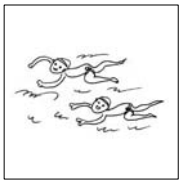
水泳



《私の通った水練場（水泳練習場）》

（文　石坂　満）

ワー、キャーとにぎやかに喚声があがり、水しぶきではしゃぎ遊びする子どもたちを、千住新橋の上で足を止めて見物する黒山の人、この風景は千住の町にいよいよ夏が到来したなと告げる風物詩だ。日光街道を千住新橋を中心にして、草加方面に向かって両側に水練場（水泳を習うところ）があった。左側（上流）に修武館、練武館、右側（下流）に講武館、正柔会とあった。昭和3年ごろから昭和16年ごろまでが最盛期だったと記憶している。私が通ったのは講武館で、夏休みが来るのがまちどおしいくらいだった。手拭を二つ折りにして袋にしてヒモを通してその中に弁当、フンドシその他のものを入れる。まだ水泳パンツがない時だ。初心者はまず最初に習うのがフンドシの締め方だ。昔の諺にフンドシを締めてかかる（決心をかたくし覚悟してかかる）と辞書に書いてある。フンドシについての諺はいろいろある。経験のない人は1回ぐらい締めるといいでしょう。初心者は赤、上級者は黒とフンドシの色で区別してある。各水練場は川岸から10mくらいのところに伝馬船を浮かべ、飛込台の櫓があった。またその両側にも小さな伝馬船が岸から5mくらいのところに浮かべてあり、10m×20mのプールのようなものだ。初心者の白い水泳帽、上級者は黒、講師の先生は赤と、これは丸太棒で柵をつくり、その中で遊んでいた。20日ぐらい経つと自然と泳げるようになり、犬かき（初心者の泳ぎ方。犬の泳ぎ方に似ているから。）で20mぐらい泳げると白い帽子のてっぺんに墨汁で丸をつける。5cmくらいの大きさだ。これが初級合格の印で三寸と言った。千住新橋付近は河口から10数kmで川幅や水深が変わり、またモーターボートが通過すると波のうねりのりを楽しんだ。当時は学校にも公園にもプールがなく、放水路がただ1つの泳ぎ場だった。川はキケンでもあり、夏になると放水路で溺れる犠牲者も多かった。戦後30年から45年の間は川の汚染もひどくなり、橋を渡る時は鼻をつまむほど臭く、水質汚染の状態になった。



《包丁池の水練場》　　（文　吉田昭三）

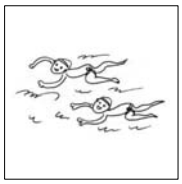
昭和15年（1940年）の夏休みの時期、水練場に行った。当時は戦争前の時期であった。水練場は江北橋の下の包丁池で行われていた。この地区の夏場の費用は個人負担が30銭で、町の負担が70銭、合計でひと夏1円であったとか。この水練場の泳法は日本泳法の向井流で指導されていたと思う。この放水路には数多くの水練場があった。対岸には日の丸プールと出雲流、水府流、山敷流、永田流。区営プールなどこの放水路の池を活用して夏を過ごした。

Y・S

私の行っていた包丁池では、小学1年生、尋常高等小学校、中学生、大学生、一般人などであった。入会すると、白帽、次が3寸。1本、2本と順次、線が増えて4本でその後は黒い色に線が入る布のテープを利用したと思う。

泳ぎには始めにバタ足、いぬかき、クロールなどいろいろな泳ぎを習いました。また砂場では、砂遊びもいろいろとした。

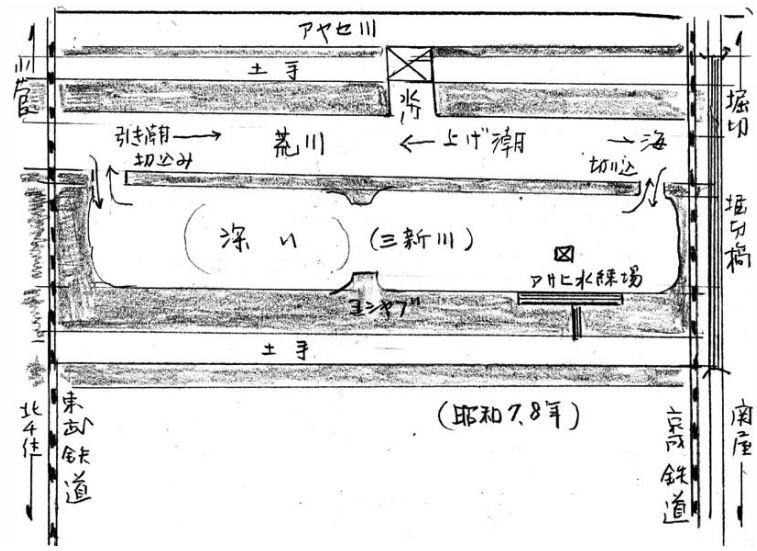
一番大変なのは遠泳だった。池の端まで行って帰ってくると口のまわりに水あかがついてひげが生えたようになってしまうので、顔を見合わせて笑った記憶がある。



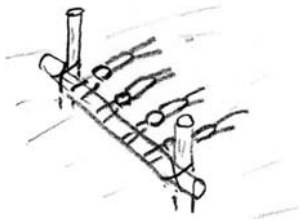
《アサヒ水練場》　　（文と絵　斉木武弥）

荒川放水路に水練場がいつからあったかは良く分からないが、昭和の始めにはプールがなく、墨田公園が出来たときに、公園内にプールができたのを記憶している。珍しくて柳原から自転車で見に行った記憶がある。千住新橋には、講武館と、練武館という水練場があった。まわりには貸し舟屋があり、ボート、ヨット、釣り舟が並んでいた。季節の良い夏にはボート、ヨットでアベックが川に出ているのが見受けられ、夏の風物詩として結構多くの人が利用していた。隅田川の千住大橋にも水練場があったと記憶している。

私が利用していたアサヒ水練場は、三新川にあり京成の鉄橋のそばにあった。土手下より桟橋をつくり、葦やぶの中に舞台をつくり、そこにトイレ、脱衣場、その他には、お汁粉屋、串カツ屋、飴屋など



があり、水から上がり、飲むお汁粉の美味かったことを今でも思い出す。女の子は水着、男は赤い褌といういでたちであった。昭和8、9年ごろだと思う。バタ棒につかまり、手をのばし足をばたつかせることが泳ぎの基本。そして水に顔をつけ、ばた足を続ける、体が浮き、犬掻き、のし、平泳ぎ、クロール、抜き手(クロールのように手を交互に出し顔を出して泳ぐ)、背泳ぎ、立ち泳ぎなど。犬掻きで少し泳げるようになると、白い水泳帽子に、母親に赤い布で3寸(10cm)の線を縫いつけてもらい、何か泳げるような気分になって、うれしかった。6級である。



バタ棒につかまって泳ぐ

「のし」(体を横にして片手で水を掻く、足は平泳ぎの足)で泳げるようになり、赤線が二本になり、5級。土手の上で型を習い平泳ぎを覚え、荒川を横断すると4級、帽子に赤線が一回り、その嬉しさはいまだに覚えている。初めて川を横断して岸に着いたとき、疲れでしばらく立てなかったことも覚えている。小学校の5年生のときである。

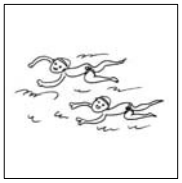
三新川は引き潮では泳ぐことが出来ず、上潮でどんどん水が増えると、階級によって泳げる。4級になるといつでも泳げ、子どもながらも優越感があった。お兄さんで3級の人で、帽子に2本線のある人がうらやましくて仕方がなかった。川の中の飛び込み台は3級以上、その上は助手で、赤い帽子に白線が1本であったように記憶している。

そして夏の終わりには、江北橋から堀切の水練場まで遠泳があり、それが小学校の思い出であり、その後荒川放水路ともしばらくのお別れであった。

戦後、何年かして柳原青年団（むかし、青年団は各町にあり、注在郷軍人会と共に町の行事に出たもの）で、もとのアサヒ水練場のあとに、常磐線の東ということで常東水練場と言うものが出来た。戦争中の無理がたたって休養中であった私は、昔、教えてもらった泳ぎの型を教えるのをお手伝いしたことを思い出す。昭和24、25年ごろと記憶している。

目標	級数	帽子のしるし
体が浮き、前に泳げる	6級	赤線1本（10cm）
のしができる	5級	赤線2本（10cm）
荒川を泳いで横断できる	4級	赤線1本帽子一回り
飛び込み台から飛び込める	3級	赤線2本帽子二回り
何でも泳げる	助手	赤帽白線一回り

注：在郷軍人会：日本は徴兵制度があり、男が21歳になると兵隊検査があり兵隊に行ったもの、2年の期間が過ぎて除隊になった人の集まり。



《夏の遊びのひとつ》　（文と絵　三木美代子）

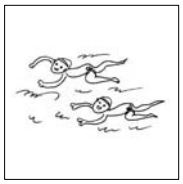
昭和10年ごろ、荒川の西新井橋の木桁から20歳くらいの男の人が赤ふんどしで、夏の昼など暑い日中に飛び込んで泳いでいた。橋を渡る人も立ち止まって、見ていたものだった。橋は今の場所より上流にあり、ボンネット型の今の東武バスものんびりと走っている様子だった。

そんな1日を泳ぎ競っていた若者も時には、死んだ者もいた。荒川は昔、住家があった所で、そのころ井戸の水が湧いていた。その冷たさに心臓麻痺をおこしたと思われる。そ

んな話を大人の話で恐ろしく、夜など聞いたものだった。泳いではいけないと子どもたちは聞いたものだった。

今の扇大橋あたりに日の丸プールがあった。別に天然プールとも言っていた。日の丸プールにはやはりお金を出して泳がせてもらったものだ。町の警防団の青年が見張りして監視していたそうだ。プールまで行く時は満潮の時は、木の細い渡り板があった。干潮となると遠浅と言って天然プール、満潮の時は泳げる。この場所は見張りをする人はいなくて、小学校5、6年生の子どもたちは泳いだものだった。

その時代の子どもたちの話によると、日の丸プールという場所はヒョウタン型になっていて、土を運んだ道が遠浅となってその辺りを全体的に天然プールと言ったそうだ。そのころの日の丸プールは川の干満に関係なく泳げたけれど、天然プールは干潮になると浅瀬になり泳げなくなった。現在は跡形もない。



《日の丸プール、天然プール》　　（文　石坂満）

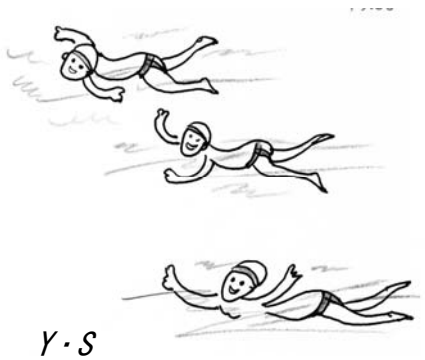
千住の子どもたちは天然、日の丸プールの存在を知っていたが、行って見る人は遠いので少なかった。本木方面に親戚、知人がいる人は別としてあまり知らない。シジミ、魚などがよく取れるので有名だった。しかし水練場がなく監視する人がいないので、よく子どもたちが溺れると聞いてキケンだから遊びにゆくなと言われた。戦後本木に住んでこの日の丸プールが太田溜という名だと、聞いておどろいた。太田はこの地名の字名だった。天然プールについてはあまり知らない。

≪水泳と荒川ビール≫　　（文　高原光雄）

毎年夏になると千住新橋の下流右岸の川に、1ヶ所丸い浮きを結び付けたロープで囲った水練場が作られた。右岸側にあった学校が使っていたが、左岸側の学校の生徒は使えなかった。

プールは昭和26年まで足立区内の小学校には無く、左岸側の学校に通っていた私は、先生には内緒で友達といっしょに遊泳禁止だった荒川放水路へ行って泳ぎを覚えた。海水パンツが無い時代だったから注六尺褌の巻き方を友達と教えあって巻いた。初めは川岸の玉石に掴まりながらチャプチャプと泳いでいたがそのうち

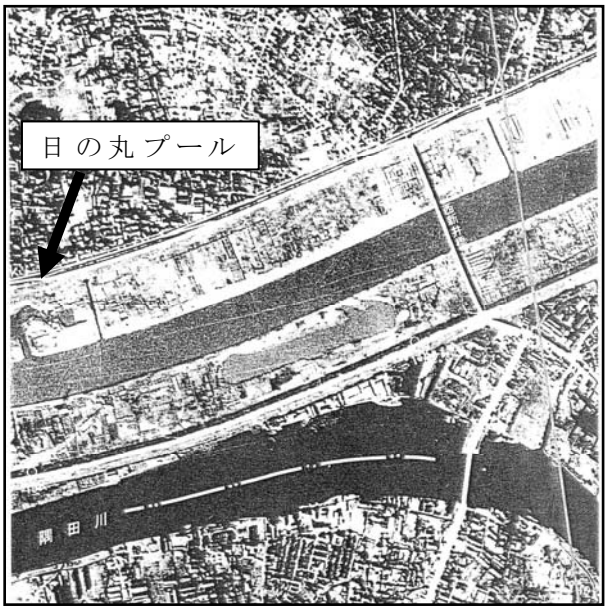
犬っ掻きを覚えた、ときどき川の水を飲んでしまうことがあり皆んなで「荒川ビールを飲んだ」と言って笑った、腹も壊さなかった。



私は大人の人の泳ぎ方を見て、平泳ぎ、横泳ぎ、背泳ぎ、面かぶりなどを泳げるようになり、高校生のころには川を横断していた。

いつのころからか水上警察署の警備艇が遊泳者を取り締まりだした。私は警備艇を見かけると急いで岸に上がり着物を抱えて葦の陰へ隠れて警備艇が通り過ぎるのを待っていた。

荒川の水は冷たかったと言う記憶がある、特に冷たかった場所は千住新橋の下近くだった、聞いた話では放水路が作られる前に井戸があった場所で、下から冷たい井戸水が湧き上がって来るのだと言われて、その後は近付かないように泳いでいた。そして冷やした身体を岸の内側にあった暖かい水溜りに入って暖め、寝そべったり、ワニのように手で櫂いて友達と競争をしたりした。



昭和22年ごろの日の丸プール付近の
航空写真
写真提供:荒川知水資料館

暖かい水溜りと言えば、旧西新井橋の上流左岸側の河川敷にあった日の丸プールを思い出す。友達に誘われて2、3回行って泳いだが、大きなプールだが深い場所でも子どもの胸辺りまでと浅く、当時の航空写真で見る通り広い水溜りだった、大勢の子どもがワーワー、バシャバシャと追い駆けっこをして遊んでいた。

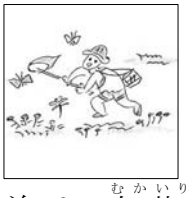
川で泳ぐ人の中には千住新橋の欄干から川へザブーンと飛び込む若者が大勢いて、その格好を見よ

うと見物人が橋の上に立ち止まって欄干から首を出していた。当時あった千住新橋の高さは現在の千住新橋に比べて3mから4mくらい低かった。

当時、多くの人が川で泳いでいたため、毎年必ず溺れて水死する事故が起きていた。そして9月に入ると新聞に水死者の集計が掲載されていた。

昭和27年、左岸側にある千住第五小学校に始めてプールが完成したほか、足立区内の学校にプールが設置された。
そして荒川の水練場はその使命を終えた。

注：六尺褌の長さは約182cm、幅約30cmの白い布(さらし)で相撲の力士のように巻いた。赤色の赤褌もあった。

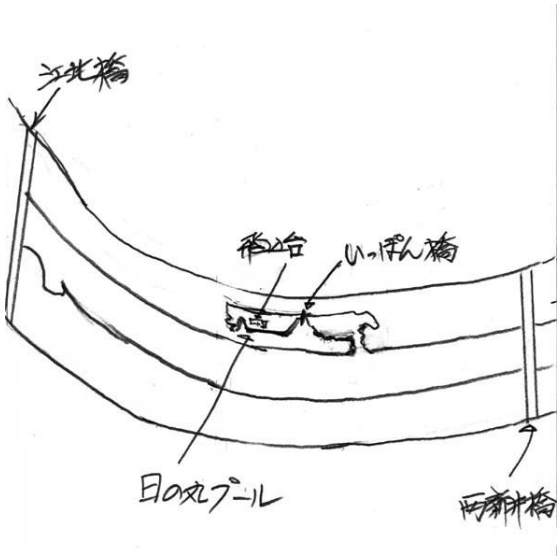


《やっぱり日の丸プール》　　（文と絵　石井清弘）

今、扇大橋がかかっているあたりから、ゴルフ練習場になっているあたりの河川敷に、戦後20年代後半まで、日の丸プールと呼んだプールがあった。戦争が始まる前は、向井流の水練場として、日本の古式泳法の、のし、ぬき手、立ち泳ぎ、さらには遠泳などが教えられ、水泳場としてかなりのにぎわいぶりであったそうだが、私の小学生時代の戦後の20年代にも、日の丸プールはまだ、時間を忘れさせる夏の楽しい遊び場だった。10円の入場料をヨシズばりの見張り小屋の監視員（先生とも呼んでいた)に支払い、小屋前の砂地になったところから、赤フン姿で水に入り、いっしょに行った同級生たちと、放課後や夏休み長い時間遊びまくった。疲れれば、中ほどにつくられていた長方形の台にのぼり身体を休め、元気になれば、その端の1mくらい高くなっていた飛び込み台からダイビング！それに引き潮の時間帯になると、飛び込み台からいっぽん橋にかけての泥地に、地元の人が節をくりぬいた50cm強の竹を3本ひとくくりにして作った仕掛けに、ウナギが、かかっているかどうかを確かめたり（かすめとり、監視員に入場料ととりかえっこしてもらった）、シジミをとったり。えっ、お腹が空かなかったかって？これも大きな声では言えないが、河川敷ではいぜんとして、ヨシなどで隠れた場所でトマトやキュウリなど作られていたので、ついついそれらで空腹をしのいだりもした。

そのような楽しい遊び場所でもあった日の丸プールだが、20年

代半ばすぎから汚れだし、泳ぐのに適さなくなりはじめ、すぐそばの寺地小学校が（区の水泳大会で、日の丸プールで力をつけていた生徒たちが大活躍、好成績をあげたことがきっかけになったという話を聞いたことがあった。）それまで防火用水槽にしていたものをプールに衣替えしたことと前後して、水泳禁止になってしまった。



とはいえ、正直に言えば、学校のプール使用は決まりが多く、いつでも好きなときに、好きなように泳げた日の丸プールは離れがたく、高学年だった30年ごろまではこっそり泳ぎに行った。そして、そのことが学校の先生に知られ、廊下に立たされことも今はなつかしい想い出である。

（参考資料）

「新版　荒川放水路物語」　絹田幸恵著　新草出版
「足立風土記稿　地区編2西新井」
　足立区立郷土博物館編　足立区教育委員会
「足立区教育百年のあゆみ」　足立区教育委員会発行
「創立60周年記念誌」寺地小学校記念誌編集委員会編
　足立区立寺地小学校
「1964年　体協のあゆみ」　足立区体育協会編

《（橋からの）飛び込み》　　（文と絵　石井清弘）

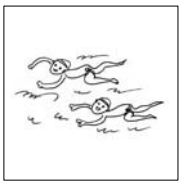
今の西新井橋は、昭和36年（1961年）に完成したもの。昔の西新井橋は、より上流の位置に大正11年（1922年）に架けられ、木造りだった。構造も今のコンクリート造りと異なり、橋脚は木を組み合わせて造った美しいものだった。

わたしが小学校高学年であった、今から50年近く前の、昭和20年代の終わりから30年代の初めのころも、夏になると、腕白坊主

たちは戦前と同様、西新井橋の欄干や橋脚から、「肝試し」のため荒川への飛び込みをした。中学生のお兄さんたちが、いとも簡単に飛び込み、誇らしげに川から上がってくる姿を、私は今でも、はっきりと覚えている。

でも、小学生にとっては、それは、かなりな冒険で、たやすいものではなかった。ハルちゃんという同級生がいた。夏、ハルちゃんも近所のがき大将にはやしたてられ、橋からの飛び込みで、肝試しをした。が、しかし、どうしたことかハルちゃんは川に飛び込んだ後、溺れてしまった。それからというものハルちゃんは、水が怖くなり、決して川や海には行かなくなり、結果泳がなくなってしまった。が、しかし、今ハルちゃんは、スイミングを普通に楽しむ。それは、成人し結婚し子どもができ、その子どもが、お父さんの悪いところを受け継ぎ、水を異常に怖がったため、これではいけないと、子どもを連れてしょっちゅう泳ぎに行き、子どもの水恐怖症を治すとともに、自分のことも治してしまったからだ。

釣り



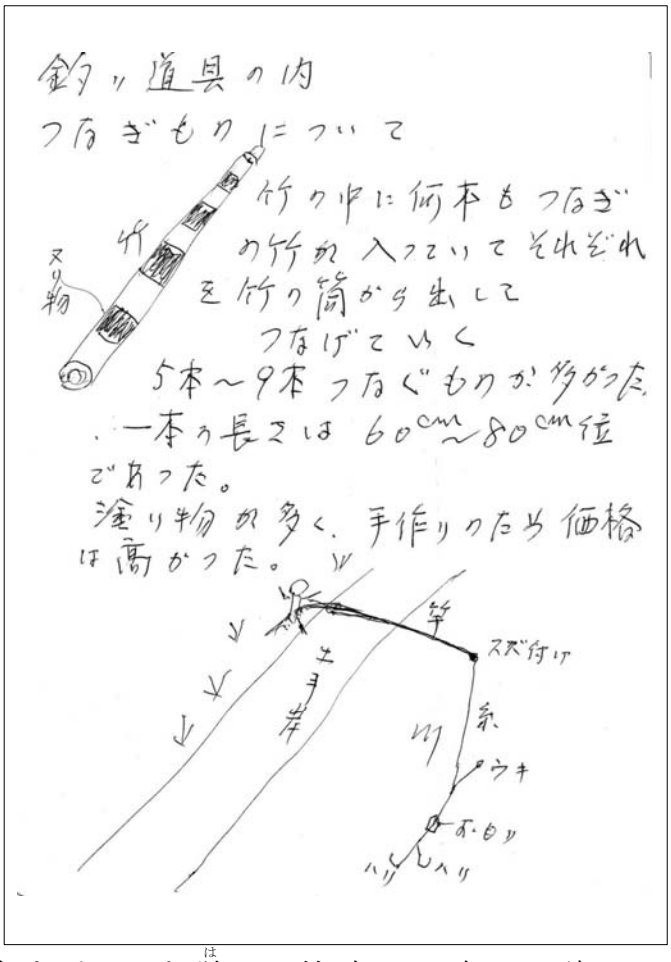
《初めての川釣り》　　（文と絵　阿部孝）

初夏のある日、近所のお兄さんに「荒川で大きなコイが釣れた」と聞かされて、私もそんな大きなコイを釣ってみたいと思った。早速近所の友達、長谷川君と次の日曜日に行く約束をした。

前日、父にたのんで竿を借りることにした。父に「つなぎ物で高価なものだから大事に使うように」と注意された。そして晩にネリと言う餌を作ってくれた。ネリとはさつま芋のふかしたものにパン粉と甘食を混ぜて練ったものだった。そして「これがコイを釣るのに一番良い餌なのだ」と父は教えてくれた。

Y・S

日曜日は良い天気だった。長谷川君と釣り道具一式を持って出かけた。途中、土手下の釣具屋田中商店に寄って釣り針と糸と餌も買った。糸と針を付けてもらい、釣りについても手ほどきを受け



た。田中屋は子どもに親切な店だった。

荒川に着いて、2人は釣れそうな場所をさがし陣取った。釣り竿は2人で7本だが、長いもの短いものと一本竿が多かった。釣り餌も何が釣れるのかわからず練り物、ミミズ、赤虫、ゴカイなどを持って行った。

釣り糸に錘、ウキを付け竿先に鈴を付けたものを用意して川に糸をたらした。つなぎ物は父からの借り物なのでコイを釣ることにして9本つなぎにしてコイ用の針を付け練り玉を餌にして遠くに放り込む、投げ込む方法はウキは付けず遠くに投げ込むだけ、糸をピーンと張って竿立てに立てて待つ。この待つ時間が楽しい、わくわくして早く魚が掛かってくれることを祈る気持ちと、竿を上げる時のタイミングの取り方を考えながら待つ時間はこころよい。

2人ともこの作業を黙って行う、口を開くと魚が逃げてしまうような気持ちでいっぱい。でもなかなか魚は掛からない、30分もこんな状態が続くとあきてくる。

その時、短い竿の鈴が鳴った。長谷川君のだ。急いで上げると手長エビが掛かっていた。餌は赤虫だった。続いて私の竿にもエビが釣れた。次々とエビが赤虫の餌で釣れた。ビクに入れて川の中に入れて置く。エビが10匹釣れたが魚は釣れない。次にゴカイを付けて釣ることにするが、魚は釣れない。

コイを釣る竿はビクとも糸が動かず、竿を上げると餌が無くなっていたので練り餌をやめ、ミミズの大きいのを付けて投げ込む。3時間

くらい釣りをしたが、エビが10匹だけで2人はあきてきた。

人々が近くまで見に来るが、あきらめて帰ってしまう。私たちも昼近くになったので帰ることにした。竿をしまいかえり仕度をしていた時、どこかの大人の人が「今ごろは日中はあまり釣れないよ、夜暗くなって釣ればコイやウナギが釣れるよ」と教えてくれた。「秋になればハゼは日中でも釣れるよ」とも教えてくれた。

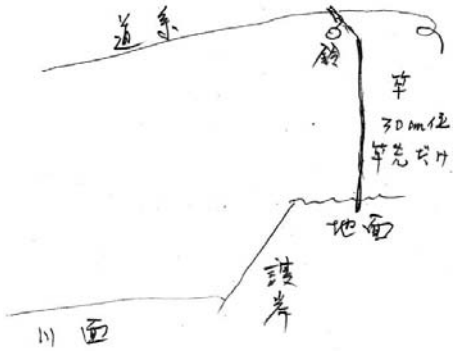
今度くる時は「大人といっしょに夜に来ようね」と長谷川君と話し合って、エビを持って帰った。エビは防火用水に入れておいたが、1週間くらいで死んでしまった。

≪ぶっこみ釣り≫　　（文と絵　高原光雄）

小、中、高校生時代の私は、夏休みに入ると釣り道具を入れた注6ポンド缶をぶら下げて荒川放水路へ行き、釣りをしたり、泳いだり、ボートに乗ったりして毎日遊んでいた。昔の投げ竿やリールなどの釣り道具は、現在とはまったく違っていた、また高価で子どもには買えなかったのでぶっ込み釣りをしていた。片手に錘の付いた道糸を40cmから50cmぶら下げて持って、その腕をぐるぐる回して勢いをつけて飛ばして岸から25mから30mくらい前方へ投げ込んだ。

そして川岸の地面に突き立てた長さ約40cmの竿の頭に、ピーンと張った道糸を結び付け、竿に取り付けた小鈴が鳴るのを待った。

ナイロンの糸が無いころで、道糸は柿の渋で染めた茶色の渋糸を使い、ハリスは絹糸で作った天蚕糸（テグス）だった、錘は15号から20号くらいで、より戻しや天びんなどの仕掛は小遣いでは買えないのでハリスを錘の留め金の環や道糸に直接結んだ。



餌はゴカイで、釣具店で買った時もあるが、ほとんどは引き潮の時に岸から砂地に下りて川底を掘り返して捕っていた。

釣れる魚は、スズキの子のセイゴ、ボラの子のイナ、ウナギ、コイ、フナ、ハゼなどで形はハゼを除くと約20cmから30cmあった。

ハゼ釣りは釣具店で買った竿先がひん曲がったのべ竿で釣り、錘は板鉛を小さく千切り使っていた。

釣り上げた魚は30から40cmくらいに切り取った葦の穂先にメザシのようにエラから口へ通して川に浸して帰るまで置いていた。

困ったのはダボハゼばかりが釣れた時で食べられないからすぐに逃がした。

夕方、葦に刺した魚を家へ持ち帰ると、食べ物が不足していた時代だから母親から誉められた、魚は醤油で煮付けたり塩焼きにしたりして夕食のおかずになった。

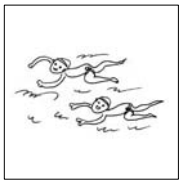
川岸から約20m前方の川底にロープが横に張られてあり、そのロープにウナギ取りの竹筒(ポーポー)が約20mから30m等間隔に結ばれて沈められていた、ときどきそのロープに釣り針が引っかかり、無理に引っ張って当時貴重だった釣り針を取られたことを思い出す。

注：バケツが貴重品だった時代で代りに6ポンド缶詰の空缶に釣り道具と餌箱を入れていた、当時6ポンドの缶詰は配給のベーコンが入っていた(一家族4人の半月分の食料)。

（参考資料）

「日光街道千住宿民俗誌　近代生活」
佐々木勝、美智子著　名著出版

魚とり（かいぼり）



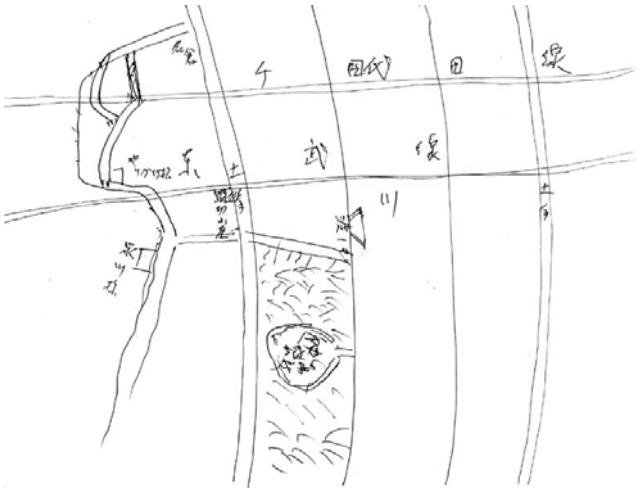
《私の秘密の場所　かいぼり》（文と絵　関根ノブ）

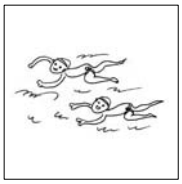
昭和9年ごろである。私のかい掘の思い出は短いが、私の秘密の場所があり、1人で堰を作ったり、水をかい出したりして、夢の国で遊んでいた。小魚、川エビ、フナ、名前のわからない魚たちがたくさん捕れ、捕まえた後は逃がした。潮の満ち干など自然のいとなみをたくさん学んだ。

私の祖父は昭和9年9月19日に魚を釣りに行くと言って出かけ

たまま帰らぬ人となった。自然の厳しさ、怖さ、優しさが身にしみた。今よりも、もっときれいな荒川でいてもらいたいと願っている。きれいな荒川こそ環境問題につながると思う。

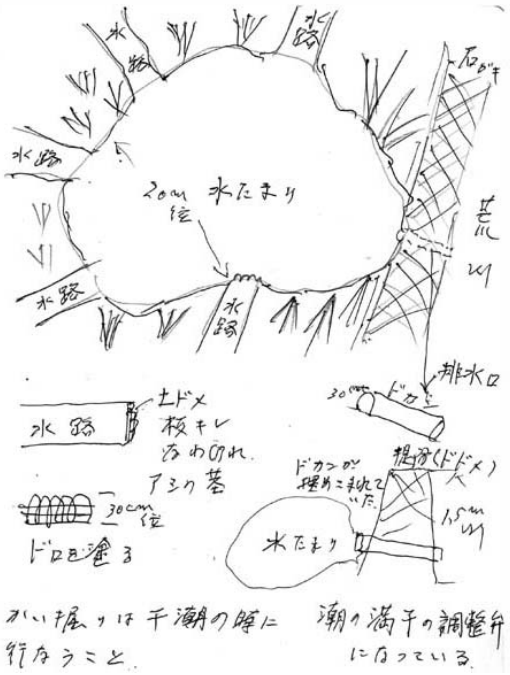
私は昭和3年3月24日に南足立郡綾瀬村大字弥五郎新田346番に生まれた。今の日ノ出町だ。昭和9年4月に、弘道高等小学校に入学し、昔、荒川ができなかったころのなごりで、小学校1年生から3年生まで、分校に通う。学校の行事がある時は、渡し舟で本校に行った。雨や風の強い時は、分校で先生のお話を聞いて帰った。分校では、ときどき田中覚次郎の名入りのエンピツをいただいた。鉄工所の社長さんで、お友達のお父さんだった。





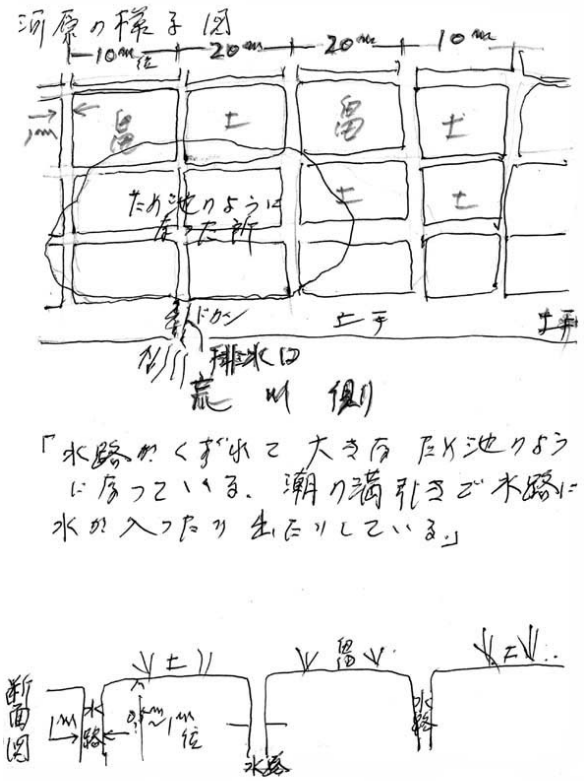
《ガキ大将とかいぼり》　（文と絵　阿部孝）

昭和17年夏休み中の1日、近所の3年生から5年生の友達6から8名は毎日荒川の左岸の西新井橋と千住新橋間の土手下の水たまりで泳ぎをするのが日課であった。ガキ大将の5年生の巌ちゃんを先頭に、はだかにふんどしをして、この日も水溜りでかいぼりをすることにした。鎌を持つもの、縄きれ、板切れ、バケツ、玉網と、それぞれかいぼりの道具を持って出発。水たまりは引き潮のときで川に水が流れ出ているので、みんなで



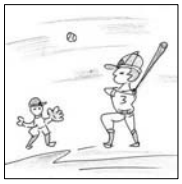
排水している、反対側（流れ込む側）に縄切れなどで水をせき止める仕切りを作る。葦を鎌で切り、縄の代わりのようなものを作り、せき止める。石ころ、板切れなども使う。

かいぼりをする水溜りは、直径20mくらいはあるので1時間くらいはかかる。仕切る箇所も6ヶ所くらいになるので大仕事、全員泥だらけになって作業を続ける。ドロを掘ってせき止めたところに塗る。高さ30cmの泥の土手を作って固める。魚の逃げる姿が見えるとみんなが水溜りに入って魚を取ることに専念する。玉網ですくうもの、手でつかむもの。全員がわいわい言いながら魚を追い掛け回す。バケツに取れたものを入れる。魚はフナ、朝鮮ブナ。エビ、エビガニ、カニ、ドジョウが主だった。大きなウナギが取れたこともあった。かいぼりが終わると全員ドロだらけの体を荒川に入って洗い泳ぎをする。これがまた楽しかった。イヌかき、平泳ぎ、背泳ぎなど各自思い思いで泳ぐ、入道雲がもくもく盛り上がっている空を見上げながら泳ぐ気分は最高、夕方になるまで遊んだものだ。



《魚とり、かいぼり》　　（文　坂田佳久）

昭和23年から25年ごろ、場所は元町から大川町の放水路で水遊びをやった。ハゼ釣りやかいぼりでエビガニやボラなどを手づかみで取り、バケツに入れて家に持ち帰った。ハゼは食べ、エビガニは年下の子どもにあげた。

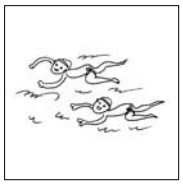


《どろんこの日々（かいぼり）》　　（文　小林啓子）

昭和32年初夏の日曜日。お昼ごはんが済んでから、前のノボルちゃんたちと荒川河川敷にかいぼりに行った。

ノボルちゃんはかいぼりの名人だ。まず、たんぼのあぜみちの上流と下流に石や木の枝を重ねて、その上や周りに泥を寄せて水をせき止める。それができるとみんなでバケツやひしゃく、手当たり次第の器でがむしゃらに水をかい出す。ヒロアキちゃんのかいた水がノボルちゃんの顔にはねてノボルちゃんが「おい、ヒロアキ気をつけろ。」と大声で言った。だんだんと水が減っていく。わくわくする。水が少なくなると泥の中で動くものが見える。泥の中に手を入れる。足の裏がもぞっとする。私はじっと立って目をつぶる。足に体当たりをしてくる魚がいる。ヒロアキちゃんが「ぎゃあ」って叫んだ。「どうしたの。」「俺の足にフナがぶつかってきたんだ」。小一の私は、魚が取れなくても、みんなの中に入れてもらえただけでうれしい。一番年上のノボルちゃんは、あぜをすこしずつほそめていってフナを上手に捕まえた。みんながパチパチって手をたたいた。

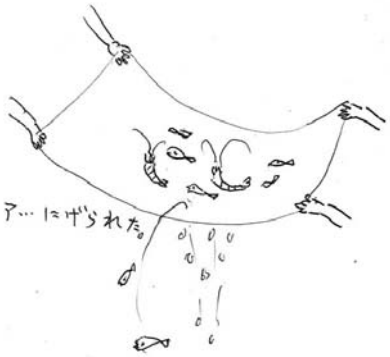
魚とり

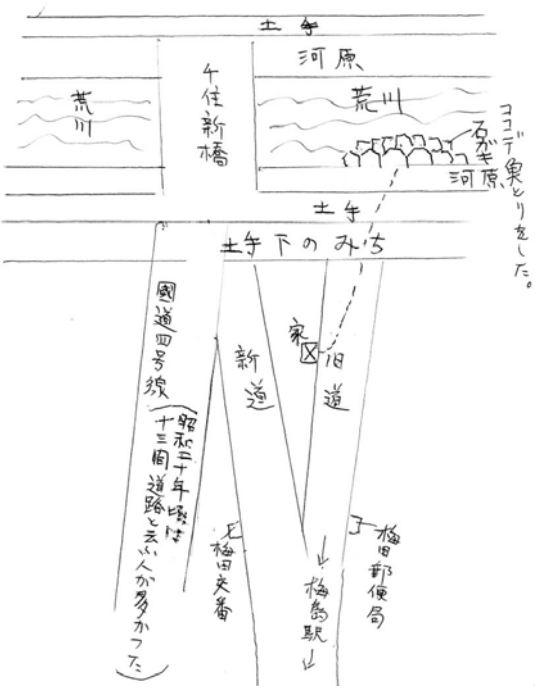


《おねえちゃんと楽しい場所へ》

（文と絵　湯田雛子）

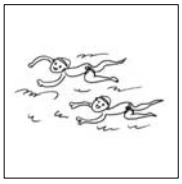
昭和7年ころ荒川の川べりで、さと子おねえちゃんと魚とりをして遊んだ。私の家から旧道を道なりにまっすぐ土手に向かってゆくと15分くらいで川べりにつく。そこには石がきがあって、はだしで入るとツルツル滑ってよく転んだが、水がひざぐらいで浅いので魚とりをするにはとてもよい場所だった。





二人で手ぬぐいの四隅を持って「一、二の三」と言いながら三ですばやく、さっと水をすくう。すると川エビ、ハゼ、フナ、メダカなど捕れた。手ぬぐいの中で、エビや小魚がピチピチとはね上がって、あっと思う間に川に逃げられた魚もずいぶんいた。水すましやゲンゴロウも泳いでいた。学校の夏休みには毎日のように手ぬぐいとバケツを持って、荒川へ行くのが楽しかった。時間の過ぎるのも忘れてしばらく遊んでから、さと子おねえちゃんとバケツを二人で持って「明日もこよう」といいながら、ときどきバケツの中のエビや小魚を見ながら家に帰るまで生きていてほしいとのぞいていた。捕ってきた魚は父が庭に作った小さな池に放したり、ガラスの金魚鉢に入れて廊下において、そこを通るたびに上からのぞいたり、顔を廊下につけるように見ていた。元気な小魚たちが、動き回るのをいつまで見ていてもあきなかった。荒川は川遊びやつみ草をしたり、いつ行っても楽しい場所だった。

エビガニとり



《カニの穴》　　（文と絵　吉田千伊知）

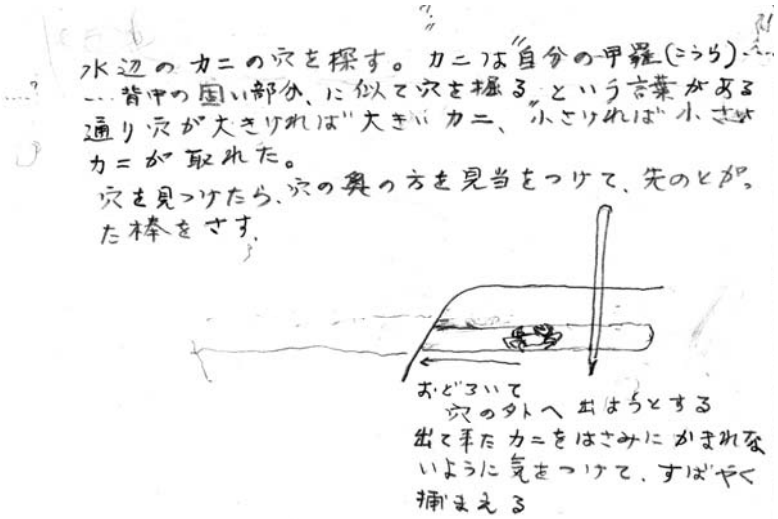
エビガニ（アメリカザリガニ）。昔は日本にいなかった。アメリカから輸入したのに2説ある。

①昭和2年、神奈川県大磯で数10匹を食用蛙のえさとして。②昭和5年、100匹（しかし無事生きて到着したのは20匹だった）。

20年間に関東一円に広がっていった。

エビガニを捕るのはかんたんで玉網でとれた。エビガニの肉を餌

にして釣りをすると食用蛙がよく捕れた。食用蛙も戦時中は大分数がふえて、ウッーウッーと低くひびくような鳴き声をしたので牛蛙という人もいた。

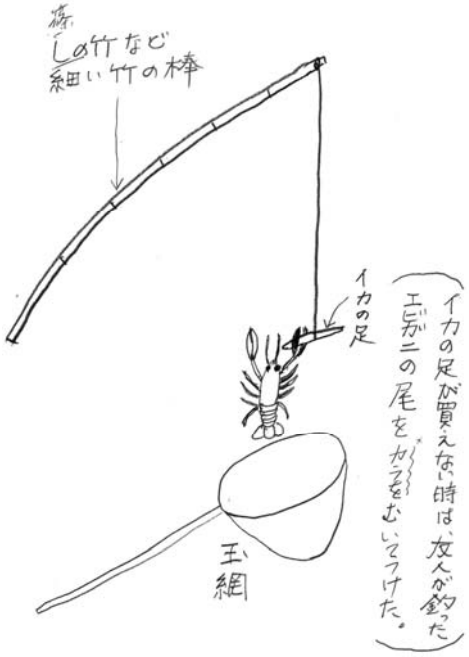


（参考資料）

「ザリガニはなぜハサミをふるうのか」 山口恒夫著　中央公論新社

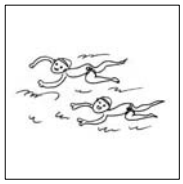
《ハサミが頼り》　　（文と絵　國谷崇）

エビガニ(アメリカザリガニ)捕りは、小さな池や田んぼの用水路、もちろん荒川河川敷の水路など、どこでも捕れた。捕り方は、主に釣りと玉網すくいで、細い凧糸や木綿糸に、駄菓子屋で売っているスルメイカの足を結びつけ、エビガニがハサミではさんで喰いついてくるまで待っている。エビガニはイカの足にハサミをくい込ませ、水の中から上に揚げてもエサを離そうとしない。かなり食物に対して貪欲な生き物だったようだ。たまには、ハサミを離されて、また水の中にポチャンと落ちて、逃げられてしまったこともあった。



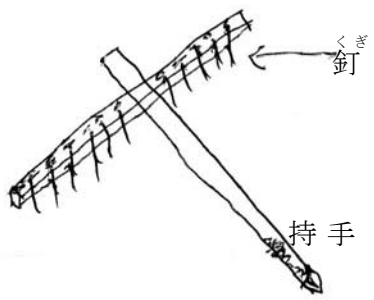
エビガニは、本当にどこでも捕れた生き物だった。昭和30年代初頭は、日本に入って来て、爆発的に繁殖し、増えた時期だったのであろう。

シジミとり

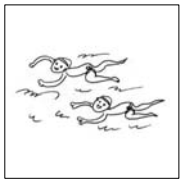


《シジミとり》　　（文と絵　三木美代子）

昭和10年ごろ、西新井橋の左岸では、橋げたの近くでシジミが捕れた。春4月から5月ごろ、水もあたたかくなってくるころになると、子どもたちもなんとなく、川遊びに行った。日曜日はたくさん集まったが、10人前後で川の近くで遊んだものだ。そんな時期学校から帰ると、4、5人くらいでシジミを捕った。2cmくらいはあったと思う。時には取ってきたら、家でバケツの水に一晩つけて置いて、明朝の味噌汁にしたこともあった。また日の丸プールへ行く途中に、遠浅の場所があり、満潮の時は一面の川だったが、干潮になると浅瀬になり、その場所でもシジミは捕れた。子どもも大人も捕ったものだった。売っていた人もいた。そのころは川の水も川底まで見えるほどきれいな流れだった。



蜆を取る道具は木と釘で作る



《思えば長く住んだもの》　　（文　斉木武弥）

荒川の近くに住んで80年、思えば長く住んだものだ。住み始めたころの住所は東京府下南葛飾郡南綾瀬村字柳原176。そのころの柳原は、方々に沼があり、葦藪があり、川があり、家の前は低い土手で、川には平家蟹、源氏蟹(注平家蟹はハサミも体も青みがかっている。源氏蟹はハサミが黄色に近い色で、ハサミが大きいので見分けていた)などの穴があり、穴の横から棒を差し込んで蟹の出てくるのを捕まえる。面白いように捕れたものである。

夏には家の裏の川に、夕方、ギンヤンマと呼ぶ大きなトンボがむ

れをなしてきて、良く捕ってあそんだものだ。父が荒川放水路の掘削のため住み着いたのである。小学校も尋常小学校といい、堀切の南綾瀬小学校の分校で3年までだった。

そのころの放水路は土手も低く、遊歩道もなく、土手の下はすぐ葦藪であった。川までの間に、三新川と呼ぶ川と言うよりは池があり、中州には葦藪があり、その先が本流である。三新川は、京成の鉄橋のそばに切り込み口があって、上潮のときはそこから川の水が流れ込み、東武鉄橋のそばの切り込みまでで、本流に流れるしくみであった。

Y・S

三新川は流れ込んだ泥で、シジミの絶好の住む場所になり、たくさんの人がシジミ捕りに来ていた。三新川は荒川を掘るとき移転されたお寺の跡とのうわさがあり、よく溺れる人がいて危険でもあったが、潮が引くと絶好の遊び場であった。砂浜がつづき、水のなくなった砂場での遊びもいろいろで、潮が満ちてくると砂の土手をつくり潮と遊び、たわむれ、楽しく過ごしたもの。シジミは手で堀り半日も捕ると、バケツ一杯になるほど捕れたものである。

危険であるが、水遊びもでき、上潮で水が満ちると、泳ぎの上手な人は中州の葦藪まで泳いで行く。今考えると、うそのような光景である。

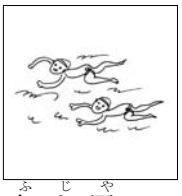
注：平家ガニはクロベンケイガニ。源氏ガニはベンケイガニかアシハラガニ。

《「葦」の読み方》

この本では「葦」という漢字の読みがなに「あし」と「よし」の2つを使っています。これは伝える会会員が当時使っていた読み方を尊重したいということと図鑑や国語事典では両方の読み方が見つかるという点からです。

アシは水辺に生え、昔から人々の生活に役立っていました。「あし」は「悪し」に通じてよくないということから、「よし（良し）」と呼ぶようになったと言われています。

ボートのり



《貸しボート屋》　　（文　石坂満）

荒川放水路の千住新橋付近での貸しボート屋さんが盛んだったのは昭和4年、5年から12年ごろまでだった。千住新橋をはさんで上流右岸に田川屋、鹿糸屋、富士屋、下流に栄屋、福島屋など大小合わせて10軒ぐらいあった。大水が出るたびにボートが流されて商売が出来なくなりやめるところもあった。貸ボートの漕ぐ範囲は千住新橋を中心に上流は西新井橋まで下流は堀切橋までだ。上げ潮、引き潮の流れにのって遠くまでゆき、帰りが大変で力がつきて、乗りすてて、帰る人がいた。戦前は貸ボートは1時間30銭、ヨットは60銭だった。ヨットは本来広い海か湖などで乗るもので川ではあまり乗らない。放水路のヨットは人気があり、都心の山の手方面から話を聞いて来る人も多かった。和船は櫓を漕ぐ人が少ないのであまり商売にならなかった。貸ボートの営業期間は春3月から8月の終わりまで、9月になると台風が来るので中旬までには休業したようだ。田川屋が一番大きかったようで昭和初期に台東から移住してきて貸ボート屋を始めたらしい。また和船は投網で魚をとるのに利用されたがゆれてむずかしかったようだ。ボート屋さんは、溺れる人を救助するのを手助けしたので警察から人命救助の感謝状が置いてあった。ボートで放水路で遊ぶには腕力がいるので体の弱い人は大丈夫かと聞かれた。

（参考）戦前昭和16年ごろ、市電は市内千住新橋から朝6時までが割引で全域10銭で乗れた。現在の500円くらい。もりそば7銭、現在の350円ぐらいを参考にしてください。

《初めてのボート》　　（文　関根ノブ）

昭和10年ごろ、初めてボートに乗った。7、8歳ぐらいのときだった。働いていたいとこのお姉さんとその妹と一緒に、私の住んでいる日の出町から歩いて千住新橋下流右岸にあるグランドに草野球を見に行った帰り、いとこのお姉さんがボート代を払って乗せてくれた。2回目は10歳ぐらいのときで、2、3年生で教えてもらった先生が友達と私を乗せてくれた。

ボートは料金が高く、お金持ちの遊びという感覚があった。1銭

（100銭で1円）で、駄菓子屋のおせんべい4から5枚買える時代で、弟はお小遣いやお年玉をためて喜んでいた。

このころ、妹や弟など10人兄弟が当たり前で、子守やお使いをさせられて遊ぶ時間はあまりなかった。「今日はカレー豚コマ切れ100匁（375グラム）買ってきて」「妹のおもりしな」というように。だけど、従兄と一緒に草野球を見に行く時や、従兄がバイオリンを弾き、近所の人が聞きに来た時は特別で、親は何も言わなかった。

《夢中でこいだボート》　　（文　高原光雄）

昭和23年、中学1年当時、千住新橋下の上流右岸に貸しボートの田川屋が一軒だけあった。今でも当時の桟橋跡の杭が残っている。

冬は河川敷にボートが何艘も裏返しに積まれて寂しい風景だったが、春になると桟橋にそのボートが繋がれて、川には多くのアベックがボートに乗りオールを漕いでいた。

またボートより一周り大きいヨットも何艘か貸し出していて、子どもの私でも借りられた。追い風を食らったヨットが舳先から潜って沈んで行くのを見て吃驚したのを覚えている。

左岸側に住んでいた私は、10円札2枚（ボート1時間分の料金）を握り締めて友達2人といっしょに千住新橋を渡った。ボートを借りて漕ぎ出したが友達と並んで後ろ向きに座って前方を見ないでオールを漕いだのでアベックのボートにぶつかって怒られた。そして遊びに夢中になって1時間以上もオーバーしてしまった、遠く離れた桟橋からボート屋の親爺が大声を出して手招きをしていたが、私は知らんぷりな顔をして反対がわの川岸にボートを乗り上げて逃げ帰ったことを思い出す。

何艘ものボートが浮かんでいた夏、川を通過する注ポンポン船が速度をぐっと落として通り過ぎて行った。

私はボートを漕ぎながら上流を見ると夕日が川面に反射して眩しかった。

注1：焼玉エンジンを使用していて、船の大きさは現在の輸送船より約二周り小さく速度も遅かった。当時の録音が足立区荒川ビジターセンターにある。

（参考資料）

「日光街道千住宿民俗誌　宿場町の近代生活」
佐々木勝、美智子著　名著出版

《ボートの思い出》　（文　遠藤浩）

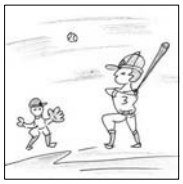
貸しボート屋が数軒あったと記憶する。その一軒が田川屋である。千住新橋右岸である。貸し賃は1時間当たりボート20円。ヨット40円でコロッケが5円であった。

春。桟橋にボートが何艘もつながれてボートに乗ったアベックも多かった。

夏。水泳シーズンでボートが漕ぎ出されてくると川を通過するポンポン蒸気船が速度を落としていたと覚えている。

冬。河川敷にボートを裏返ししてペンキを塗る光景が見られた。

（上）昭和45年ごろ　千住新橋上流左岸より右岸の田川屋。（下）船を拡大。旗には「田川屋」の文字。
ここから東京湾へ潮干狩りに出かけられた。
写真提供：石坂満（会員）

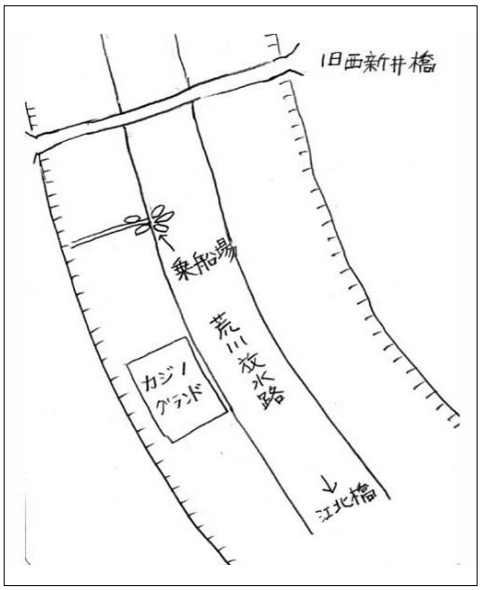


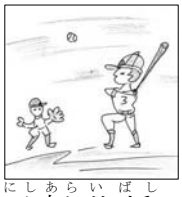
《ボートこぎの学習場》　（文と絵　國谷崇）

荒川でのボート乗りは、楽しい遊びのひとつではあったが、子どもには乗船賃を捻出する余裕がなく、大人について遊びに行った時や、特別な小づかいをもらった時しか乗れるものではなかった。昭和30年代ごろにボート乗り場は、西新井橋や千住新橋付近にいくつかあった。手こぎボートのほかにもヨットが何艘か置いてあり、風向きのよいときには、そう快な船遊びだった。乗船場は、台風の大水や河川敷の浸水が進んでなく

なってしまったのだろう。そのおもかげは、現在新四ッ木橋と木根川橋の間にある乗船場に残っている。もっとも屋形船やクルーザーのような立派な船はなかったが。

子どもは、ボートに乗って、オールのこぎ方をずいぶんと覚えたものである。時には調子に乗って、レガッタ用の船に近づいてコーチに怒られたことや、夏場、荒川で遊泳している知らないお兄さんにボートをゆすられて驚かされたりしたことを今でも思い出す。





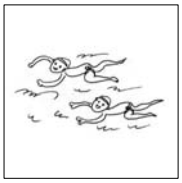
《思い出をかりて》　　（文　則竹秀子）

田舎のない佐藤さんの家では、そのころ日暮里に住んでいたので、荒川土手にはよく歩いていった。自然にふれあうには、子どもにとっては良いところだった。西新井橋のところから土手に下りて行くのだが、橋の少し上流のところに貸しボート屋があり、土手でめいめいが自分の好きな遊びをして、疲れたり、あきたころ、ボートに乗せてもらった。

昭和 39 年　西新井橋近く
写真提供：佐藤為重氏

娘さんの話。「子どもにとってボートに乗せてもらうのは贅沢な遊びなので、家族といったときのことです。こげない私はただボートに乗っているだけで、ボートの上から水に手を入れたり、遠くにいるボートの人に手をふったり、ボートが傾くとキヤーキャー大声を上げたり、写真をとってもらったりして、ボート乗りは楽しかった良い思い出です。」

虫とり

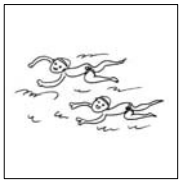


《河原のホタル》　　（文　吉田千伊知）

昭和の初めのころの虫とりで、まず記しておかなければならないのは、ホタルが飛んでいたことである。夏の風物詩としても、足立区にも自然の状態でホタルが棲めるくらいきれいな水辺があったことがわかる。荒川放水路の河原でホタルを捕って、部屋に吊ってある蚊帳（蚊に血を吸われないために、麻で網のように編んだ。箱の形の底のないもの。緑色で涼し気な寝具。）の中に入るとゆらゆらと飛んで、それは今考えると夢のような美しい風景だった。

そのくらいだから、トンボは鬼ヤンマ、銀ヤンマ、シオカラ、ムギワラ、お女郎トンボ（イトトンボの仲間）などたくさんいた。秋になって赤とんぼは無数に飛んでいた。捕るのは玉網、鳥もちの棒、手とか、いろいろな捕り方でとっていた。バッタ系ではオート（殿さまバッタ）、これは他のと違い、ずい分長く飛べるバッタである。オートを捕るのはすばしっこさと根気が必要であった。ショウリョウ、コメツキバッタなど。

べつにとりはしなかったけれど、いた虫をあげてみると、ゲンゴロウ、ミズスマシ、アリ、コオロギ、スズムシ、アメンボ、オケラ、玉ムシ、イナゴ、ハチ・・・・蜂にはさされて目の上がはれた痛い思い出がある。ヒル、ミミズなどたくさんいた。



《鳥もちを使ってトンボとり》　　（文　斉木武弥）

私は柳原に住んで82年、旭町と柳原の境の道も、私の幼いころ（昭和8、9年）は川であった。

川の両側は葦藪でいろんな生き物がいて、栄橋、中の橋、大原橋とあり、夏場になるとギンヤンマという普通のトンボより大きな、なかなか捕れないトンボがいた。シオカラトンボ、ムギワラトンボはどこでも捕れた。捕るトンボは、夕方になると群れをなして飛んでくるので、子どもたちがみんな玉網をもって、大勢、川の両側に集まり捕ったものである。夕飯の時間を忘れ、親に迎えに来られたこともたびたびであった。玉網でなく篠竹に鳥もち（今のガムに似ている）を駄菓子屋で買い、篠竹の先に指に水をつけながら30cmくらい巻きつける。篠のしなりを利用して飛んでいるものを捕り、木や草に止まっているものはそのまま鳥もちにくっつけて捕って遊んだも

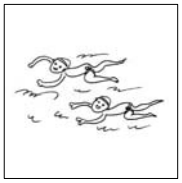
の。乾くとつかなくなるので、毎日水で乾かないように、巻きついている上からなぞって保たせた。ギンヤンマの羽にもちが付くのがいやで、玉網を使ったのを覚えている。

そのなかに、ギンヤンマの雌があれば大騒ぎ、尻尾のつけねが、雄のヤンマとちがった色をしていて、なかなか貴重ないきものであった。それが混じっていると、また楽しい遊びができたからだ。

雌のトンボの羽の間を木綿糸で結び、雄のヤンマのいるところで、円を描くと、雄のヤンマが飛びついてくる。それを捕まえるという遊びで雌のヤンマを大事にした。

そういう遊びも今は昔語りとなり、子どもの遊びも変わってパソコン、ゲームというような、家の中の遊びとなった。荒川という、大きな遊び場があることを忘れているみたいだ。こんな近くに川、河川敷があり、草、鳥、魚がいる。河川敷には実のなる木もあり、特に胡桃の木もたくさんある。

大いに荒川を利用しよう。



《蜻蛉と遊ぶ》　　（文と詩　熊岡健三）

昭和10年から18年ごろ、荒川の川原でトンボとりをする。大きなトンボ銀ヤンマは、もちの木の内皮から作った粘着材の鳥もち（駄菓子屋で売っている）を細い竹にぬった竿や、網でつかまえる。うまくつかまったのが、ナーヤン（女銀ヤンマ）だと、棒の先に結んだ糸に結び、ゆっくりと、まわし続けると、トコヤン（男銀ヤンマ）がジャン（交尾）しに来る。ジャンするとすぐに網でつかまえた。トコヤンしかおとりがいないときは、しっぽのつけねの空色のところに、死んでしまったナーヤンの同じところ（銀色）をくっつけて使う。ほかのトンボは、よくとまるので、網でつかまえることができる。団扇ヤンマ（車ヤンマといっていた）は、しっぽの先が団扇また車のように見えた。鬼ヤンマ（蛇ヤンマといっていた）は、鬼のきもの、虎の毛皮のような模様だ。赤トンボや、トーセミ（糸）トンボは手でも上手にやると、すぐにつかまった。つかまえたトンボに、ハエや蚊をあげる

とよく食べた。だけど益虫（人のためになる虫）なので大切にしましょうと、学校の先生や大人の人に教えられた。

トンボの詩
トンボのめがねは空の色、銀の色、大地の色
色々なサングラスをつけている。
トンボは、ヒコーキのように飛ぶ
プロペラがついていない。ジェット機かな。ちがうなー。
トンボは、ヘリコプターのようだ。
空中でとまったり、早くとんだりする。竹トンボのようだ。
河川敷は、航空ショーの会場みたいだ。
未来のユメ一杯のトンボの、空中曲芸飛行だ、すばらしい。
ここらで、ひと休み。木の枝やハッパにとまる。
だけど、トンボのめがねは、くるくるうごく。

《虫とり　夏休みの宿題》　（文と絵　坂田佳久）

昭和23年から25年ごろ、場所は元町から大川町あたりでは、虫捕りはおもに荒川土手と大川町公園や神社であった。とりもちを細い竹竿にぬった。「とりもち」は駄菓子屋で売っていた。現在のガムのようなもので、チョウや、トンボをとり、玉網または手づかみで、てんとう虫、イナゴ、バッタなどを夏休みの宿題として学校に持っていった。

Y・S

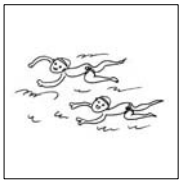
《ブンブンオート》　（文　國谷崇）

少年にとって、ある種の昆虫をかわいがることは、現在も昔も変わらないだろう。カブトムシ、クワガタ、ミンミンゼミなどなど数え上げたらきりが無い。ただ、昔の少年にとっては、それらの昆虫がペットショップやデパートで売っている近頃の現実には、思いもよらなかったことだ。原っぱや森の中をか

けずりまわって、おもいおもいの虫を見つけ、それを捕まえてかわいがるのがすべての昔の少年の姿であって、特に、荒川土手は、オートと呼んでいた殿様バッタ、ギンヤンマなどの昆虫の宝庫であった。

オート(トノサマバッタ)はイナゴを二回りも大きくした体型で、土手の草原の斜面を茶褐色をした羽でぶんぶん飛び回り、見つけてもなかなか捕まえるのが難しかった昆虫だ。大きく精悍なオートを捕まえた時は、やはり大きく立派なトンボのギンヤンマを、足場の悪い河川敷を渡り歩き、苦労の末に捕まえた時と、おなじぐらいの満足感があった。昭和33年から35年ごろの思い出だろうか。

草すべり



《こもすべり》　　(文　関根ノブ)

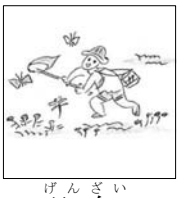
土手の草が枯れると、東武線が走っている鉄橋の下流右岸の土手に、こもや畳表を持って草すべりに出かけた。

こもはワラを荒く編んだもので、当時はただワラと呼んでいて、左官屋さんや焼き芋屋さん、酒屋さんからもらった。左官屋さんはワラを刻んで粘土などと練って、しっくいの壁を作るのに使った。焼き芋屋さんはワラを燃料に、酒屋さんはこもかぶり(こもでくるんだお酒の樽)を売っていて、いつも店先に置いてあったので「おじさん、ちょうだいね」と言ってもらった。

Y・S

畳表は畳をどこの家でも使っていたので、表を数年使うと畳屋さんに裏返してもらい、また何年かたつと新しい畳表に張り替えてもらった。それをなにかあるかもしれないともらっておいて、草すべりだけではなく、おままごとにも使っていた。

土手ではこもや畳表の一辺を束ねて持ち、お尻の下に敷いて、最初は地面を蹴って、スピートが出ると足を伸ばして地面から上げてすべる。そうかい感があって何度もやった。



《土手すべり》　　（文　高原光雄）

秋になって土手の草が黄色く枯れるころになると、土手をすべり落ちる子どもの歓声が賑やかで、秋から春にかけての遊びだった。

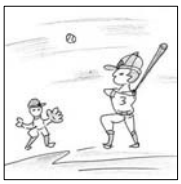
現在、プラスチックのソリやダンボールに跨ってすべっている子どもを見かけるが、当時、川の左岸側に住む子どもたちはトタン板の切れ端や古い注ござ(畳表)に跨りすべっていた。

木製のソリは見なかった。向い側の千住大川町方面は戦災や水害に遭っていなかったから木製のソリを作ったと思う。

戦後の焼跡にはあちこちに焼け残ったトタンが落ちていてそのトタン板の切れ端を拾って使った。

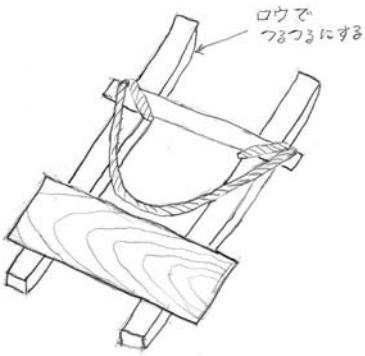
また当時は毎年のように台風が上陸して洪水になり、ほとんどの家で水が床上まで上がる床上浸水の被害に遭っていてその度に家具や畳を濡らした。濡れた畳は天日に干してから畳屋さんを呼んで畳の表だけを張り替えて使っていて、現在のように濡れた畳を捨てる人などは無かった、だからどこの家にも古いござ(畳表)が束ねて置いてあった。

注：畳表の大きさは畳1枚分。



《ほろ苦い草すべり》　　（文と絵　國谷崇）

昭和34年、秋のある晴れた日、タカシは学校が終わるのももどかしく、家に急いで帰った。今日は、近所のノーヤンと土手すべりに行く日だった。昨日、父親に手伝ってもらって作った注1草ぞりは、近所の遊び仲間の誰にも負けない立派なものであった。家からは荒川の土手まで歩いて15分ほどで着いた。



土手にかけ上がると、馬の手綱のようなロープをにぎりしめ、坂を一気にすべり下りた。次の瞬間、タカシは土手の草の上に仰向けになって青い空をながめていた。ちょっとした草の凹凸で、みごとにひっくり返っていたのである。でも、草の上だから、体のどこも痛くない。すぐ立ち上がって、また土手のてっぺんからすべり下りる。また転ぶ。

何回も何回も繰り返しているうちに、だんだん転ばないですべるコツがつかめてきた。いっしょに来たノーヤンもすべっている。土手すべりは、本当に楽しい。

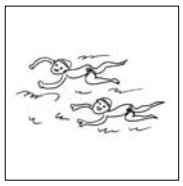
タカシのすべっていた場所では20人ぐらいの子どもが遊んでいただろうか。はじの方から、バラバラッとそりをかついで逃げる子どもがでてきた。なんだろうとそちらの方をみると、うわさに聞いていた、土手の[注2]こわいおじさんが大声で怒っているのだった。タカシは逃げるのに夢中で、大事な草ぞりを置いてきてしまった。おじさんは、草ぞりを返してあげるから、取りにおいでと言ってくれたが、タカシはこわくておじさんのそばに行けなかった。

後でわかったことだが、草ぞりは土手の草の根っこをいためて、土手そのものの強度を弱めてしまうそうで、土手を管理している方々には、草ぞりは困った遊びだったようだ。

注1：そりのすべる部分は、窓わくに使われていたような角材やたる木を使った。みかん箱やりんご箱の板もはがして使った。

注2：荒川下流河川事務所の調べによると、当時、生活排水を荒川に流すための水門は、排水樋間（現：排水樋管）といい、西新井橋北詰の近くの水門は本木排水場樋間と呼んでいた。その管理は本木町会などの自治会に任されていた。草すべりを注意したおじさんは、その自治会から委任されて、水門の開閉や掃除をしていた方ではなかったかと想像している。

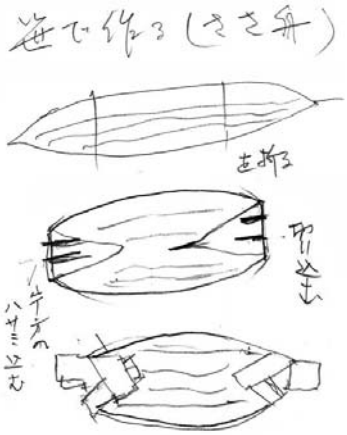
草花遊び

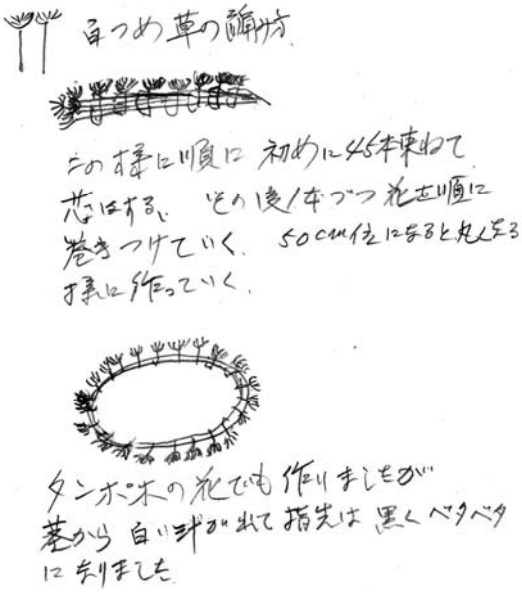


《草花あそび》

（文と絵　三木美代子）

昭和10年代、春になると大勢の人たちが集まる、大人も子どもも。左岸の土手にはクローバーまたの名前をシロツメ草。そのころは、白くて30cmくらいまであり、子どもたちが座ると、顔だけしか見えないくらい。今のシロ





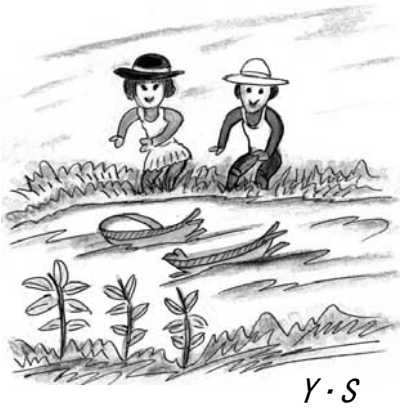
ツメ草と違って、三つ葉の葉は1つの葉が1．5cmくらいあり、花も満開になると、1つが2cmくらいあったように思う。この花を集めて、日向ぼっこをしながら首飾りや髪に挿すカンザシを作ったりして、出来上がるころは水分も無くなり萎れてしまった。また、竹の笹舟を作ったりして川へ流した。水も綺麗だったので、長閑で楽しい子どもたちの遊びだった。

夏になると色水遊び、萎れた朝顔の花を集めて手でもむと、ピンク、青、紫色などの色水を作って、お店ごっこをした。今は朝顔もなかなか見ることもない。ヨモギの葉っぱも夏になると、同じように色水を作り、濃い緑色だったことを思い出す。手に付いた色は、中々取れない。今と違って石けんを大事にしていたせいもあったと思う。春の四ツ葉のクローバーを探すのも楽しいものだった。時には5枚くらい葉が付いたクローバーもあった。

秋になり、草が枯れるころ、花の名前も知らなかったが、花の枯れたのを取り、投げ合って洋服へ付けたりした。今は解ったが、キク科のアメリカセンダン草という花だ。

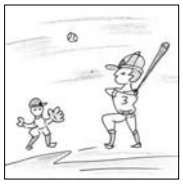
《川遊び》　　（文と絵　坂田佳久）

私が小学校4年から6年の昭和23年から25年ごろ、場所は元町から大川町の荒川放水路の土手で遊んだ。記憶では、魚とり、水泳、虫とりなどで、自然の中で遊びを楽しんだ。帰りに見かけた女子の遊びの一つに、草花をつんで花かざり、うで輪、くびかざりなどの遊びがあった。当時男子と女子の遊び方がことなっていたような気がする。



《笹で船をつくる》　（文　坂田佳久）

昭和23年から25年、場所は元町から大川町、水路のすみに茂(しげ)っている笹(ささ)で舟を作り、水路で友達と浮(う)かべて、レースを楽しんだ。また木片(もくへん)で舟を作り、浮かべて、夏休みの宿題として学校に持って行った。



《青空の下》　（文と絵　則竹秀子）

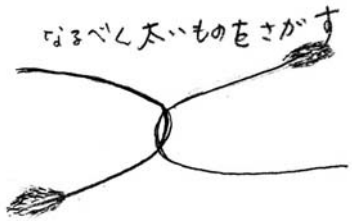
土手で草花遊びと言えば、シロツメ草に代表される。年代、年齢(ねんれい)に関係なく遊べる。だれでも一度は手にしている。土手に行くと、まずたくさん咲(さ)いているところをさがし、四ツ葉のクローバーをさがす。中々見つからないから、だれかが見つけた時には、大歓声(かんせい)が上がる。今度は、花を摘(つ)みためる。めいめいが自分の作りたいものにする。かんたんなものは花束、小さいもので指輪(ゆびわ)、たくさん摘んで首かざりやヘアバンド(このころはカチューシャといった)。

みんなで力を合わせて摘み、花のなわとびを作った。このころのシロツメ草の茎(くき)が今より長かったので、作りやすかった。でも、なわとびで実際(じっさい)に使うとすぐ切れてしまう。ばらばらになったのを分け合い家に持ち帰り、いく日(にち)か大切にしていた。

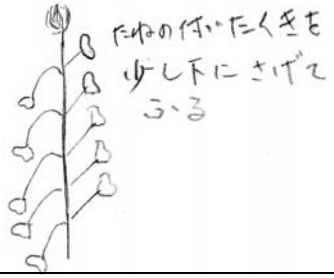
昭和39年ごろ　旧西新井橋近く
写真提供:佐藤為重氏

花別の遊び方を紹介(しょうかい)します。

〈オオバコの茎(くき)の引き合い〉
先に切れた方が負け

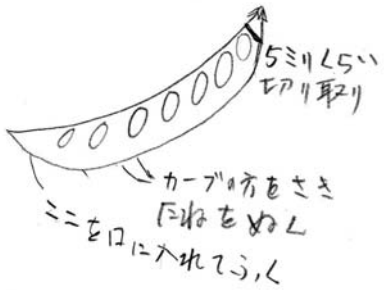


〈ナズナの音出し〉
種を茎から5mmくらいはずしてふる。サラサラとやさしい音が出る。

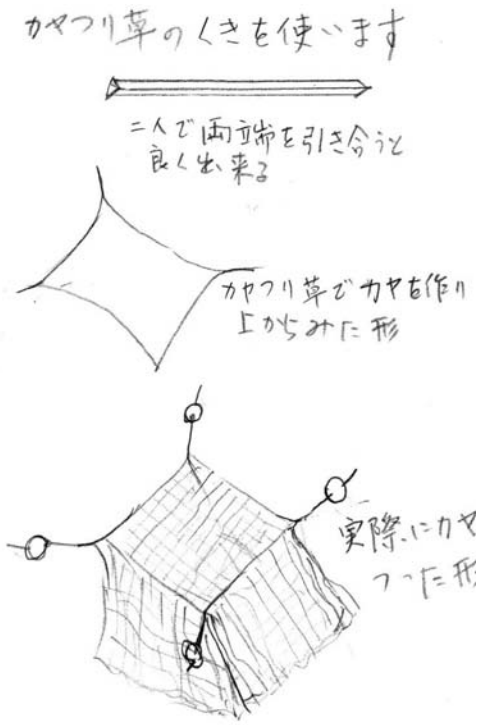


〈ススキ、タンポポの綿毛飛ばし〉
わざと相手のいる方に飛ばしたり、飛んだ綿毛を追いかけたり、時にはトンボがいっしょに飛んだりもした。

〈鳴らして遊んだもの〉
カラスノエンドウはとても変わった音がし、鳴るようにするにはちょっとむずかしい。青くてかたく実ったのをさがし、中の種をぬいて吹く。子どものころ、埼玉県北部では、カラスノエンドウをシビビーと言っていた。吹いた音が、「シビビー、シビビー」と聞こえるからだと思う。この荒川でも、昔からカラスノエンドウと呼んでいたのだろうか。6月中ごろになると、土手にはたくさん生えています。摘んで吹いてみませんか
。



〈カヤツリ草でカヤを作る〉
茎の両端を互いにさいて広げる



〈いたずらをしたこと〉
草むらの中に人の通る細い道があり、両わきにのびているオヒシバやチカラシバなどを結んで、大人を転ばして楽しんだ。また、草むらの中に草を結んで、友達を呼んで転ばしたりして、自分は逃げた。

〈オナモミ、イノコズチの種のなげ合い〉
服に付くとなかなか取れず、そのまま家に帰りしかられた。

〈水たまり〉
水たまりでは、花や葉っぱを浮かべたり、時には小さな虫が乗ることもあった。

〈押し花〉
季節ごとに、土手の花を持ち帰り、押し花をたくさん作り、学校で友達と見せ合ったり、交換し合ったりした。

《草はらっぱの日々》　（文　小林啓子）

昭和33年初春、小2の私は学校からの帰り道、荒川土手で道草するのが好きだった。一面のシロツメ草は白と緑のジュウタンになる。においたつ草いきれの中に寝ころぶと180度の空がある。遊び仲間と約束のある日曜日は路地角ににぎやかに集合だ。今日は5人、一斉に土手に駆け上がれば真っ先にシロツメ草集めにかかる。編み込んで飾り物を作るにはあきれるくらいのシロツメ草が必要だからだ。お姫様になりたいカオルちゃんは、シロツメ草のネックレスに指輪、イヤリングまでしている。ヨウコちゃんが花冠をカオルちゃんの頭にのせてあげるとニッコリしてうれしそう。大きめの葉っぱを見つけてタンポポのお顔やスミレのお顔を差し込んで草人形ごっこ。ヨウコちゃんは「ナズナのささらのやさしい音を聞かせましょう。」と人形にもやさしい。何でも競争競争と言うカズコちゃんはオオバコの茎をしごいている。スミレとタンポポの花、茎も引き合って勝負。「負けっぱなしはいやだ！」とカズコちゃんが勝つまで終わらない。

秋になってもメヒシバの日傘はとても日除けにならない。メヒシバのかんざしを髪にさし、日傘を持ったユミちゃんがオシロイ花の実をつぶして鼻すじに付けている。オシロイ花のパラシュートは風に流されるくらいがいい。私が高く高くほうり投げるとクルクル回って落ちる。何度でも楽しい。実のつく秋の草でのおままごとはクニちゃんのお母さんが真ん中だ。イヌタデのアカマンマを見つけたらクニちゃん母さんは「今日はケイちゃんの誕生日だよー。アカマンマごはんだよー。」と葉っぱのお皿によそってくれる。おかずは草の実の盛り合わせ。セーターを着て遊びに行くころにはオナモミやイノコズチを探す。キャァキャァと歓声をあげて投げつけては逃げる。逃げては投げつける。ヨシコちゃんは「いいよ、つけて、つけて。」と言って前も後もオナモミだらけ。それを見てみんなで大口をあけて笑い合う。

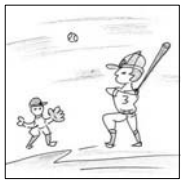
ヨシキリの巣さがし

《卵探し》　（文　遠藤　浩）

春、西新井橋上流右岸のヨシ原にすんでいるヨシキリが、ヨシの茎に止まってギョギョシ、ギョギョシ、ゲシゲシと大きな声で鳴くのを聞くと、巣があると思い探して見つける。数人で探し、卵を食べたという覚えはない。卵は長径2．2cm、短径約1．6cm淡赤緑色の地に褐色、灰青色などの斑点がある。

（参考資料）

「荒川わくわくブック」 荒川下流工事事務所

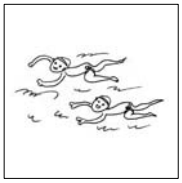


《葦の島》　（寄稿（絵も）　頼住憲一）

この辺に住んでいる子どもたちは、荒川土手を単に「土手」と呼んだ。この土手で遊ぶのは、やはり、春から夏にかけてだ。寒くなると、水辺なので遊びはやらなかったと思う。河川敷には、区営の野球場や、夏には、昭和20年代の荒川はかなり澄んでいたので、「日の丸プール」と呼ばれていて、荒川の水を引いた水泳用のプールもあった。

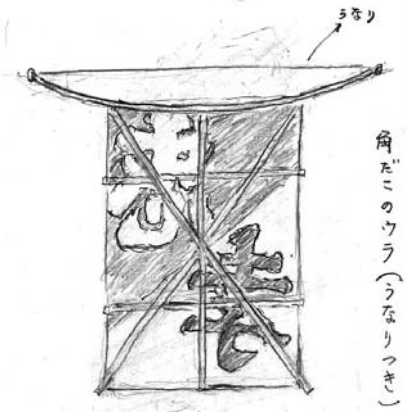
河川敷には、一部水没しているところがあちこちにあり、葦が茂っていて水路のようなものができている所があった。この水路は底に粘土質が多かったので、子どもでも胸まで水につかって入っていけた。水路の中には、葦の茂った、島のようなところがあり、カニ捕りや運がいいときには、ヨシキリ（葦にすむ鳥）の巣を見つけることができた。水路を伝って奥に入って行く時には、なぜか静かであまり気持ちの良いものではなかった。後になって、昭和36年ごろであったと思うのだが、ボートを借りて水路の中に入った時には、もうヨシキリの巣を見つけることはできなかった。

たこあげ



《大凧揚げ》　　（文と絵と写真　吉田千伊知）

凧揚げと言っても、私の子どものころは、昭和のはじめ、戦争が終わるころまで（1945年）だったから、原っぱや空き地がほうぼうにあって、ふつうの凧を揚げる所には困らなかったので、荒川では大きな凧を揚げていた。タタミ1畳以上の凧を父親が好きで、いい風（凧を揚げるのに丁度よい風）が吹くと、声がかかって、よく揚げに行った。人数は最低でも4人は必要だ。凧を持つ人が2人、糸目の所で大人が1人、そのずっと後ろにもう1人、というように。大凧はかなり重さがあるので、一番強い風でないと揚がらない。タコ糸は麻をよって作った丈夫なもので、太さは丸いエンピツを少し細目にしたくらい太いものを使った。それが長くないと高く揚がらないから、石油カンより一回り大きい木の箱がいっぱいになってしまうほど、たくさん用意した。



字凧

大きな凧の糸目はビックリするほど長い。糸目だけで凧が揚がるくらいだ。子どもの時だったからはっきりしないが6mぐらいはあったかもしれない。糸目も麻糸で太さは普通のタコ糸の3倍ぐらいはあった。

六角凧のウラ

凧の上部には「うなり」をつける。うなりとは籐を6mmくらいの幅のものをうすく、けずったものを細い竹を弓なりにそらした両端に結びつけたものである。これが風の強い日には振動して、ブーウーンと、ブルブルーンという音の中間ぐらいの音が鳴る。だから「うなり」という。これが凧好きには、たまらない良い音色なのである。

昭和30年
千住新橋上流右岸

凧の左右を1人ずつ両手で支えている。頃合いを見て「よーし」と声をかけ2人が手をはなすとブーウンとうなりながら凧が揚がる。糸目の所で糸を持っている者は、スルスルと少しずつ糸をひかれるままに伸ばす。ここでスーッとまっすぐ高く揚がればしめたもの、後方へ向かって「はなすぞ！」、「あいよ」と返事があれば少し下ってから糸をはなす。一気にグンと高く揚がる。前の2人、中の1人も急いで後へ行き、強く引っぱっている糸を持ちながら、どんどん糸を伸ばす。さすがの凧も大分小さく見えるようになり、うなりは誇らしそうに、ますますうなる。糸を出し切ったら、太い棒を少し、後ろ斜めに差し、それにグルグル巻きにして、結わく。

これで一休み出来る。なかなか引きが強く、大人1人では引っぱられそうになるからだ。

凧の大きさは西の内何枚という呼び方をした。西の内1枚は幅が1尺1寸、縦が1尺6寸である。1尺は約30.3cmである。

西の内は「西の内紙」の略で、茨城県久慈郡諸冨野村西野内（現在は茨城県常陸市山方町）から出来た、ややあらいけど、丈夫な生漉の和紙のことである。

あがりきった大凧はかなり強く、大人1人では引っぱられるくらい。そのくらいだから、おろす時も大変だ。元の方を持っている人と別にもう1人が糸を下へおさえるようにして、少しづつ前へ進んでいき、糸目の札の所までくる。ここまで来ても凧の引きは強く十分に揚がる力が残っている。そこで糸目札の下側2段をまとめて左手で押さえる。すると、凧は急におじぎをするように下向きになり、地面におりる。なかなか豪快なものである。

凧は大きいので運ぶのが大変だ。だから組立式になっていた。

横の骨以外は抜くことは出来るように、しんちゅうで作ったうすべったいサックが、紙のはしにつけてある。縦とはす向かいの骨を抜いて、くるくると巻いて細長い木箱に入れて運んでいた。

もしかすると、これは父の工夫でこうなったのかなとも思う。

戦前（昭和26年以前）では組立式の凧は珍しかった。

昭和30年　千住新橋上流右岸
大凧を組み立てる

父は自分で作って、絵は絵師に描いてもらっていた。金太郎、鬼若、丹下左膳など5枚ほどあった。

父の話では講談の大島伯鶴、俗曲漫談の柳家三亀松などの有名人も千住新橋の河原に大凧を揚げにきていたとのことである。

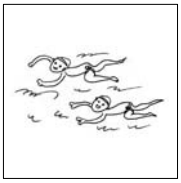
大凧は下谷（台東区）稲荷町の橋本禎造、竜泉寺町の今井龍谷など凧絵師がいた。千住では絵馬屋の吉田政造（7代）、吉田弥五郎（6代）も頼まれれば描いていた。普通の凧では千住3丁目の富士屋（白亜のあった所）が木版で摺った本格的な江戸凧を売っていて、大変繁昌していた。安い凧は駄菓子屋、文房具店などでも売っていた。奴凧、文字凧（龍など）、六角凧、とんび凧、だるま凧など。「奴凧は手のひらぐらいの小さいのから、だんだん大きくなって、一番大きいのは左右1mくらいのものまである。これを問屋がおろす時、12枚奴、9枚奴、3枚奴と束ねて売る。大きいほど数が少ない。大判の同じ紙でとれるだけとるので値段は各組奴とも同じである。」（「江戸凧絵史」斉藤忠夫）

普通の凧揚げでは、近所のフトン屋のお兄さんは冬になると天気のいい日には毎日のように凧揚げをするほど好きで上手だった。男の子はたいてい凧揚げが好きだった。

女の子はあまり揚げていなかったと思う。奴凧やだるまの目には裏にロウが塗ってあって空に上がると目が光り、なかなか迫力があり、相手の凧糸を切るというケンカをするテクニックを使った揚げ方もあった。

（参考資料）

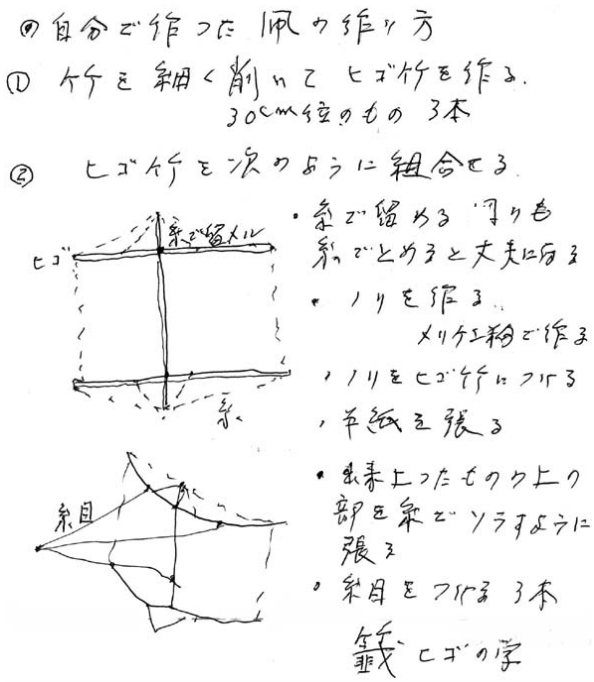
「江戸凧絵史」 斎藤忠夫著　グラフィック社

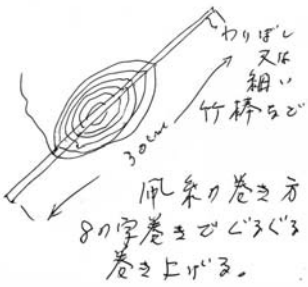


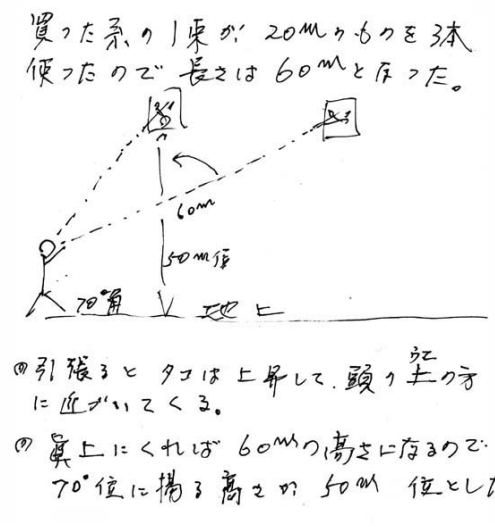
《けんかたこ揚げ》　（文と絵　阿部孝）

昭和16年正月、荒川左岸で西新井橋と千住新橋の土手で正月休みの北風が吹いている時、近所のタアーちゃんとかずちゃんと一緒に凧揚げに行くことになった。正月父から買ってもらった角凧を持って、近くのオモチャ屋で糸を買って土手に行った。タアーちゃんは糸目を見てもらい、糸を付けて揚げる準備が出来た。タアーちゃんは奴凧、かずちゃんは四角凧と3人とも違う凧だった。糸は買ってきたものを30cmぐらいの棒に巻き直し使う。この棒に巻くと糸をくり出す時巻き込む時、すばやくできることをタアーちゃんから教えてもらった。

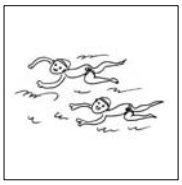
揚げる時は土手の上から河原に向かって北風に乗せて揚げることが一番早かった。私の凧は少し揚げるとくるくる回って河原に落ちてしまう。2人の凧は50m上手に揚がる。シッポをつけないので落ちてしまうので、シッポをつけることにする。新聞紙を切ってノリで貼り付け長さ3mくらいにして凧の下の方に2本つけてバランスを見ながら調整する。なかなかうまくいかない。何回も揚げて見てはバランスを見てシッポの長さを付けかえる。最後は草の茎をつけてバランスが取れた。3人ともうまく高く揚がった。自分の凧の揚がり具合が良くなるまで、2時間くらいかかってしまった。汗ビッショリ、でも揚げるコツがわかり、糸の強弱、遠く高く揚げる時の糸のくり出し、引くコツがわかると凧が自分の思い通りになって楽しくなる。土手の草むらに寝そべって空を見上げる気分は自分が空に浮かんでいるような感じがした。しばらくしてタアーちゃんが凧のケンカをしようと言いだし、凧と凧とを交差してからませることか







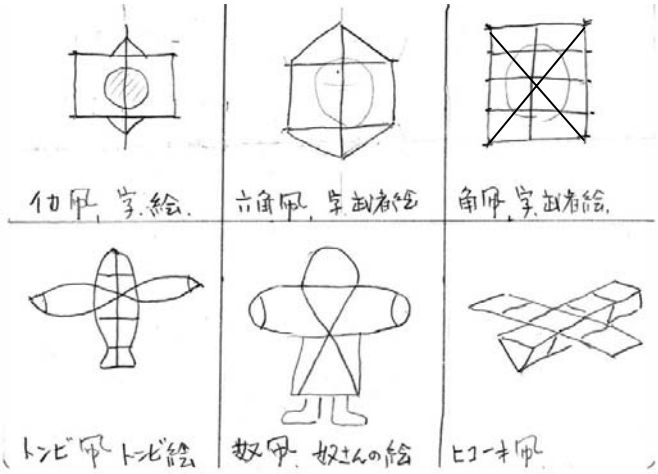
ら始める。3人の凧と糸が空中でカラ巻くと、3人とも自分の糸の引く力を加減しながら相手の糸を切ることに専念する。それぞれの凧は右に左にゆれながらケンカしているように見える。そのとき、かずちゃんの凧の糸が切れて川の中に落ちてしまった。タアーちゃんは「やった」と大きな声をあげた。かずちゃんは、「あゝ凧が川に落ちる。ちくしょうやられた。」と大きな声でさけび悔しい顔をした後、泣き声をあげながら糸をたぐっていた。かずちゃんの負けである。こんな遊びをして凧揚げを楽しんだ。その後、凧を買うのをやめて、自分で作った凧を揚げることを覚えた。竹を細く切って組み立て、半紙とか障子紙をノリで張って凧のようにして糸目を付けて揚げて見る。こんな凧でも十分揚げて楽しんだものだ。



《お父さんの大凧揚げ》　（文と絵　斉木武弥）

父が、凧が好きで、畳1畳の大きさの凧を、家の6畳間の天井に吊り下げて、会社（注東京電灯、4本煙突のボイラーマン）の休みのとき、荒川の河川敷でよく揚げたものだ。凧糸は、麻糸で大きな籠に順序よく巻いて入れたのを持って行く。籐で出来たうなりをつけ、昭和と書いた凧は父が自慢の大凧、土手の上を駆け足で行くと、うなりながら揚がっていく。大勢の人が見上げる空に、大凧はうなりながら揚がる。落ち着いてくると、糸をどんどん伸ばし小さくなって揚がった凧、子ども心（昭和6、7年）に優越感に浸れる時である。

父が、凧が好きであったせいか、凧には興味があり、いろんな凧を揚げたもの。凧は、専門店、提灯屋、駄菓子屋、などで商っており、角凧、トンビ凧、奴凧、六角凧、いか凧、飛行凧。角凧には武者絵凧、字凧、模様凧などあり、買って来た凧に付いている糸目では気に入らず、糸目をのばして、得意になったものである。糸目がうまく出来ると、舞うこともなく良く揚がり、糸を杭などに結び、遊んだものである。

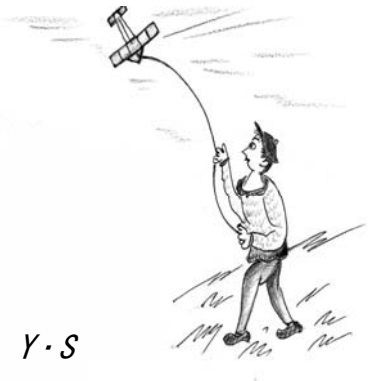


荒川土手まで行けないときは、家の前でよく揚げたもの。そのころは家も少なく、二階家も少なく、電信柱も、電話のある家も、また自動車もあまりなく、家の前でよく揚げた。揚げたのはおもに、いか凧で、安くて、糸目も2本で簡単に揚げられたので、それから奴凧を買ってもらったときの嬉しさ、揚げたくて揚げたくて、学校の終わるのが待ち遠しかったのを覚えている。

注：東京電灯は昭和26年に東京電力に改名

≪凧上げと飛行機凧≫　　（文　高原光雄）

年末になると、駄菓子屋やおもちゃ屋の店先に凧が吊るされて年の瀬の風景になっていた。安価な凧は束ねて吊るされてお年玉でも買えたが、高価な凧は武者絵が描かれた角凧や奴さんの奴凧だったから親や親戚から買ってもらった。



当時の凧上げは羽根突きやカルタ取りなどと同じ「正月の遊び」だった。

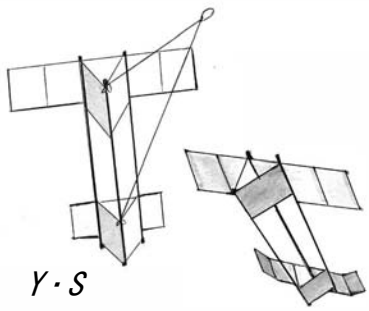
だから凧上げの期間は正月を挟んだ学校の冬休みの間だけで、友達と連れ立って新しい凧を持って左岸側の土手を登り、北風に吹かれて頬を真っ赤にして鼻水をたらして凧糸をあやつった。

もちろん、戦争で一面焼け野原だったからどこにいても凧上げは出来たが、土手の上は場所が高いから風が強く吹いていたので、土手から1kmくらい離れた所に住んでいた子どもたちも土手へ来て凧上げを楽しんでいた。

右岸側の土手は北風が民家の方向へ吹いていたためか土手の上で凧を上げる人はほとんど無かった。

《飛行機凧》　　（文　高原光雄）

現在、カイト凧を上げる人が多く凧糸が急角度に上っているが、昭和22年から23年頃に流行った手作りの飛行機凧も凧糸が真っ直ぐ上へ向いていた。



カイト凧と同じに糸目が無く凧糸を直接飛行機凧の先端部の下に結んだだけで真っ直ぐ垂直に飛んだ。

飛行機凧は模型屋から竹ひごを買って来て飛行機の形のように骨組みを組んで障子紙を張って作った。

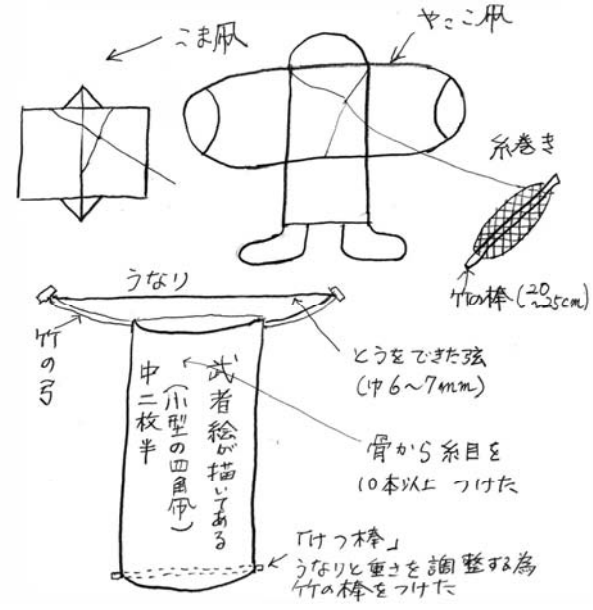
〈飛行機凧のサイズ〉

主翼の長さ90cm幅20cm、尾翼の長さ50cm幅20cm

胴体の長さ90cm高さ20cm、胴体は2枚作り底辺を結んだ。

《うなりの迫力》　　（文と絵　國谷　崇）

今でも、凧揚げ大会などの行事には大勢の子どもが参加し、凧揚げは人気のある遊びの一つにはなっているが、昭和20から30年のころは数少ない冬の遊びとして凧揚げがとても流行っていた。また、凧を揚げる技術も、けん玉、独楽廻し同様、今の子どもたちよりはるかに器用だった。



一番多く揚げられたのは、こま凧だ。この凧は細い木綿糸でも揚げられるいわば凧の普及版で、中心の下に新聞紙を細く切った尾をつければ、狭い場所でも簡単に揚げることが出来た。

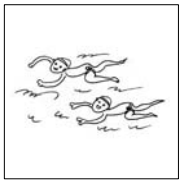
奴凧は、大奴、中奴などがあり、大奴になると幅1m以上もあった。奴さんの絵

が描かれている紙は、破れにくい丈夫な和紙が使われていて、糸も径が1mm以上もある凧糸で揚げた。

私の父は凧好きで、冬のある時期になると、「うなり」の付いた「中二枚半」と呼んでいた四角凧を買ってきてくれた。この凧の全体の大きさは大奴凧より小さいのだが、揚げるのがとても難しく、父にいろいろ教えてもらいながら揚げた。糸目も買ってきたときよりも多く付け、そして長く調整し、凧糸はベーゴマのひもを使ったから、大奴凧よりはるかに強い引きだった。

四角凧の中では比較的小さい凧だったが、籐のうなりは腹の底に響くような低い音を発し、かなり遠い所でも聞こえたそうだ。その時分、うなりのついた四角凧を揚げていることは少なかったので、うなりの音に引かれて寄ってくる人がたくさんいた。その人たちは決まってこう言う、「あの凧は、1畳ぐらいあるんですか？」。それほど、うなりの音は迫力があったのだろう。ただ残念だったことは、他の凧がくるくる回って揚がらないほど風の強い日でないと、なかなかうまく揚がらない事だった。

花火



《戦前の花火大会》　　（文　吉田千伊知）

戦前の花火大会は、「千住の花火」大会という名称で、大正13年に千住新橋の開橋記念として行われた。それが好評で昭和14年まで続いたが、戦争が激しくなり、中止された。当時は今と違い千住新橋から鉄橋までの間で打ちあげられた。私は1回だけ舟からの花火を観たことがある。おわんみたいな形をした花火玉のからが、ぷかりぷかりと、たくさん浮かんでいたのと、舟の酔いと、おすしの酢とで酔って気持ち悪くなった思い出がある。そのころ両国の花

火（今は隅田川花火大会）と千住の2つだけで、今のようにあちこちで行われなかったから、人出はたくさんだった。それが戦争のため中止になったのは残念だった。千住ヤッチャ場に出入りしていたから埼玉県の人も見に来たぐらい評判だった。

当時の花火は今と違って色などは地味だったと思う。

戦後復活したのは昭和24年8月13日だった。

《花火の歴史》　（文　中村光明）

花火は、旧盆（今の8月13日から15日）のころ、先祖の霊の供養と地域の人々に、暑い夏の一夜の涼を提供する夏の風物詩の定番である。花火は、火薬類を燃焼あるいは爆発させ、その時生じる光、火の粉、火花、煙、音などを鑑賞するものである。

最近では、打ち上げ場所付近でも住宅が密集し、昔のように大玉（尺玉、八寸玉）を打ち上げることは出来なくなり、大きな音に驚いたり、空いっぱいに広がる大輪の花を見ることが、出来なくなったのは残念だが、花火職人さんたちの努力のお陰で新しいが工夫されたり、スターマイン、ワイドスターマイン、早打ち、水中花火、大滝（ナイヤガラ）、仕掛け花火から音楽花火、地上孔雀花火などが鑑賞できる。

写真提供：足立区観光協会
撮影：山田太郎氏（平成15年7月）

花火は「江戸の華」と言われ、下町っ子が、待ち遠しくその日を指折り数えて待っていた夏の最も楽しい行事である。

花火大会当日は、日中からゴザやムシロを持って、河川敷や土手の斜面に、見物場所を確保するため、両親や祖父母に小遣いを貰って、はりきって荒川へ向かったのであろう。夕方になると国道4号線、東武鉄道の小菅駅方面から、多くの人々が見物に押し寄せてきた。昔は高い建物がなかったから、家の縁側や物干し台からも、良く見えたとお年寄りから聞いている。

花火大会会場周辺では露店が数多く店を並べて、スイカ、ラムネ、カキ氷、アイスキャンデー、イカ焼き、焼きソバ、綿飴、味噌オデン、焼きトウモロコシ、ヨーヨー、金魚すくい、ほかにも楽しく欲しくなる物を売っていた。大人たちは親類の人や親しい友人を招いて、花火を見上げながら、手作りの料理をつまみ、酒を酌み交わしながら夏の一夜の親睦を味わった。

こんにちでは、なにか行事があると冬でも打ち上げられる。週末に打ち上げる遊園地などもある。

「足立の花火」は、昔「千住の花火」と言われ、隅田川に架かる千住大橋が大水で流された時、架け替え、改修されたのを祝って明治19年（1887年）に打ち上げられたのが始めと言われている。

現在の花火大会は、大正13年（1924年）荒川放水路（現：荒川）に、千住新橋が完成したのを祝って打ち上げたのが始まりである。千住新橋は荒川右岸の千住の人々と左岸の農村地帯の人々の往来交流の要所であり、埼玉地区の人々が千住の市場への往来にも大切な橋である。そのころは、東京での花火大会は千住と両国の2ヶ所だけであったので、地元の自慢、名物であり、多くの人々が見物に見えた。以来10回ほど開かれたようだが、昭和14年（1939年）不幸にも戦争状態になり、昭和24年（1939年）戦後の国土復興と人々を元気づけるために、復活するまで約10年間中止された。8月13日、区の再興と発展とを願って復活し、仕掛花火30基、打ち上げ花火520発、人出約60万人という記録が残っている。目玉は、「足立名物千住新橋の大瀧」（ナイヤガラの滝と言われる長さ約200mの花火）である。

昭和28年（1953年）足立区観光協会が設立され、花火大会も観光事業となり、入場料を取る桟敷やイス席が設けられたりしたが、昭和31年（1956年）「花火大会」から「花火と演芸」を楽しむ「区民納涼大会」に変わり、すべて無料になった。

その内容は花火100から200発、演芸とノド自慢などが行われたが、昭和34年（1959年）を最後に再中止となった。

たび重なる夕立による延期や水害、地盤沈下によりグラウンドが使用不能になったり、国土、産業の復活に関わる公害問題（水質汚染、メタンガスの発生による悪臭、ヘドロの堆積）で魚の棲めない死の川となったことや、経済、産業構造の変化で開催が難しくなり、昭和35年（1960年）から阿波踊りを中心とした納涼大会が復活

し、昭和53年（1978年）納涼大会に花火が打ち上げられ、昭和54年（1979年）納涼大会の目玉を「花火」とし「足立の花火」が再復活し、足立の荒川の夏の風物詩として定着し今日に至る。

この夏の風物詩が末永く続くよう願いつつ、関係者方々の努力、苦労は誠に大変なことでしょうが、毎年足立の夏の夜空いっぱいに花火が打ち上がるのと、多くの人々が見物する賑わいを想いつつ、今年の「足立の花火大会」を今から楽しみに待っている。

―注―　花火の種類

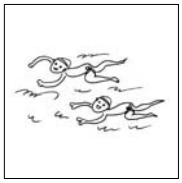
・単発花火：同じ筒から1本の玉を打ち上げる花火の基本。
・早打ち花火：同じ筒から連続して多数の玉を打ち上げること。
・スターマイン：短時間に何10発と連続して打ち上げる花火のこと。1ヶ所だけでなく何ヶ所からか、一斉に打ち上げるスターマインをワイルドスターマインという。
・同発：複数の筒で玉を時間差なしで一気に打ち上げることで、いろいろの花火が重なって見え花束のように見える。
・音楽花火：点火を電子記号としてコンピュータ制御することで操作を自由にすることができ、音楽の雰囲気に合わせて花火を打ち上げることは、非常に難しく花火師の腕の見せ所だ。ある会場では詩の朗読を花火の打ち上げと調和させて行ったそうだ。
・地上孔雀花火：普通空中で開く花火を水面または地面に設置し、半円状に開く形が、孔雀が羽を左右いっぱいに広げた形に似ているため孔雀花火という。

（参考資料）

「足立区近代史年表」 足立区役所編、発行
「足立の今昔」 足立区役所編、発行
「足立の歴史　改訂版」 足立区役所編、発行
「足立風土記稿　地区編1千住」
　足立区立郷土博物館編、足立区教育委員会
「足立史談第139号　荒川の夜空を彩る3千7百発」
　関根光治著　足立区教育委員会
「新版　荒川放水路物語」 絹田幸恵著　新草出版
「葦立ち恋風　新・千住ものがたり」 宮城春彦著　今日のアジア社出版局

「荒川ワンダーランド」 井出隆雄著　イーノ
「日光街道千住宿民俗誌　宿場町の近代生活」
　佐々木勝、美智子著　名著出版
「第26回足立の花火大会プログラム」(新聞ちらし)　足立観光協会
「ときめき　2004年5月15日（244号）、7月15日（248号）」
　足立区公社等連絡協議会
「あだち広報　7月25日（第1410号）　足立の花火」 足立区

土手遊び



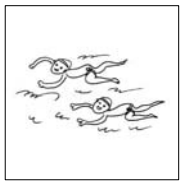
《小さな遊び》　　（文　三木美代子）

昭和10年代、秋も終わりになるころ土手の草は一面に白く茶褐色になって、からからに枯れてくる。このころ土手を管理しているおじさんが枯草に火をつける。このようなことをするのは、来年の春に良い草を刈り取るためだ。調べたところ、土手を管理していたおじさんは土手近くに住んでいた人で、軍馬用の草を刈ってそのころ兵隊さんのためになっていた。そして生活の一部としていた。子どものころ火をつけるのを見計らって子どもなりの遊びをした。

自分の上着を脱いで消したり、また、新しく火をつけたりして、遊んだ。薄暗くなるころ家に帰ると母親に叱られ、顔は真っ黒に、上着は泥だらけ。こんな遊びも手伝い方々で楽しみの一時だった。でも、火傷をしたりした子どもはいなかった。

現在の区立寺地小学校からまっすぐ行った所に事務所のような建物があった。その当時近くに住んでいた同級生に聞いたところ、旧本木4丁目町会事務所だったとのことだ。現在は高速道路になってしまった。

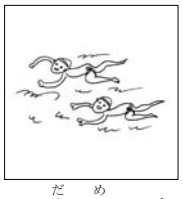
河川敷で遊べなかった理由



《悲しい花火》　　（文　吉田千伊知）

戦争中はあまり遊びに行かなかったけれど、遊ぶと敵機に狙われ機銃掃射を受けて危険だった。

昭和20年4月13日の晩、千住方面（中居町・竜田町など）の空襲があった時、荒川の土堤、河川敷は避難した人、焼け出された人でいっぱいになっていた。焼夷弾が対岸の梅田方面に花火のように落下していった悲しい風景を忘れることができない。

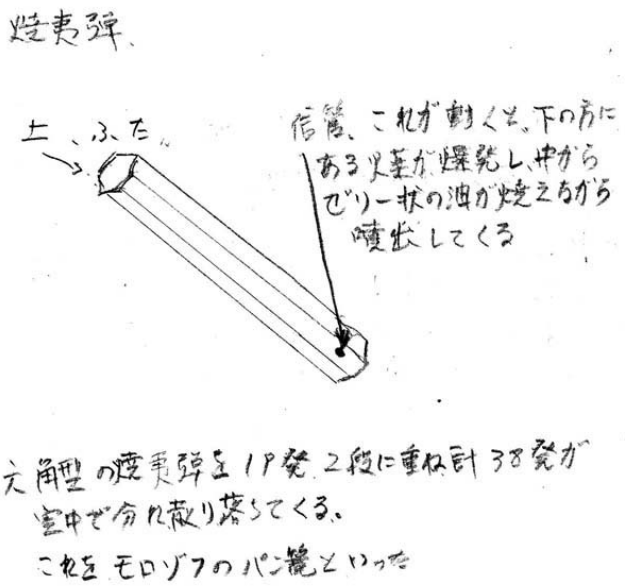


《キケンがいっぱい》　　（文と絵　熊岡健三）

昭和19年から20年の太平洋戦争（第2次世界大戦）の終りのころ、アメリカ軍の飛行機が人を見つけると撃って来るので、隠れる所のない河川敷では遊んでは駄目と大人に言われた。

また[注1]焼夷弾の中身はイオウと油をまぜた物で、燃えながら飛び散る。または爆発していない爆弾が埋まっており、爆発するとけがや死んだりする。

それにアメリカ軍の飛行機を落とすために、足立区内から撃った[注2]高射砲の弾が、空中で破裂するので、破片が飛び散って頭に当たるのを防ぐため、座布団を二つ折りにしたような防空頭巾をかぶったが、それでも安心できず、だから飛行機を見るとすぐ隠れた。



河川敷は野菜などの畑なので、盗られないように見張っている人がいた。

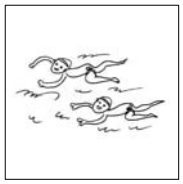
土手は大水になった時に崩れると大変なので、

畑は作らなかった、それで土手には草がたくさん生えていたが、食べられる草はすぐ採られたからあまりなかった。

太平洋戦争が終わったら、こんどは昭和26年ごろ朝鮮で戦争が始まり、金属が高く売れるので焼夷弾などを掘り出す人が来て、危険な物がなくなり、安心して遊べるようになった。そして景気が良くなってきたので、食物も買うことができるようになった。

注1:焼夷弾の大きさは長さ約90cm直径15cmで、何10個も束ねられた大きな爆弾のような形で、飛行機から放されると同時に分解してばらばらに落ち爆発して飛び散り燃えた。特に田んぼに落ちた場合は、爆発をしないで花火のように火柱が上がったと伝えられている。

注2:高射砲は飛行機を撃ち落す大砲。



《さよならの日》　　（文　小林啓子）

小学校入学から1ヶ月で転校した私は、家から小学校への道がわからず荒川土手の上を通学路とした。

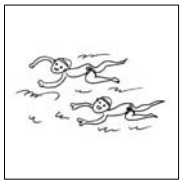
大きくうねる道を朝は小走りに、帰りはのんびりと歩く。土手の上から見える景色は高い建物もなく360度のパノラマだ。

土手は危ないと注意されたことは何度もある。誰かがヘビに追いかけられた。変な人がウロウロしている。車をよく見ないとスピードがあってあっという間にぶつかってしまう。川岸は危険、河川敷がぬかるんで足をとられる。輸入材木に付いて来たマツクイムシが河川敷で大発生した。

ほかにもたくさん言われたけれど、毎日歩いている道端や、河川敷に吹く風や、川面に光る優しいさざなみは、くらしの中の自然そのものだった。

いつからか、ほんのわずかな月日の間に、荒涼とした土色の河川敷に変わっていった。私の通学路も友達の家経由となった。

水の汚れ・死の川と川岸の変化



《環境のバロメーター》　　（文　関根ノブ）

水の汚れは環境をあらわすバロメーターだと思う。

昔は川にゴミを捨てる人はいなかった。川で泳ぐと泥が舞って汚れるけれど、しばらくすると泥は底に沈んできれいになった。飲めるほどではなかったが、触るとさらさっらとしていた。今はべたっとしているように感じる。

環境を良くするためには川の水をきれいに、荒川をきれいにしてもらいたい。

≪川の透明度≫　　（文　高原光雄）

現在、荒川の川岸に立って水の透明度を観察すると、昭和25年ころの透明度に近く、戻っているように感じる。

国土交通省の調べによると透明度は昔に近く回復してきているが、水質は重金属類や有機化合物などの汚濁物質が残っている。従って荒川での水泳は無理だが魚釣りは大丈夫でしょうという答えだった。

≪死の川25年間の暗い時代≫（文　高原光雄）

昭和20年代後半から、荒川放水路は地盤沈下と水質汚濁が進んだために、魚が全く住まない「死の川」へと変わってしまった。昭和37年ころには千住新橋を渡っていると下からプーンとドブ川の臭いが鼻をついた。

そのため国が対策を始めた。荒川知水資料館の資料によると、昭和40年に荒川放水路の管理が東京都建設局から国土庁（現：国土交通省）へと移って、名前が荒川放水路から荒川と変わった。そして45年に水質汚濁防止法が施行された。

その後、井戸水の汲み上げ禁止の結果、地盤沈下が止まったほか、汚れた水などを流さない水質汚濁防止の規制が実施されて水質が改善してきている。

そして浄化が進むと同時に国土庁の調べによると、昭和58年ごろから川に魚が少しづつ戻って来て、約25年間続いた「死の川」の時代は終わった。

この間、昭和53年に千住新橋の下流右岸の川岸で、注ラジオ番組が呼び掛けて早起き釣り大会が開かれた。

聴取者約100人が釣りに参加して、1 時間にわたり挑戦したが1匹も釣れずに終わった。私は番組に関係した一人として荒川にまったく魚が住んでいなかったので暗い気持ちになった。

現在、川岸には澄んだ水が打ち寄せて、初夏には川海老が釣れ出し、セイゴ、イナ、ハゼが釣れるようになった。

そして私は、昔の川に戻ってきた川辺を楽しみながら、この荒川を二度と「死の川」にしてはならないと思っている。

注：ニッポン放送「お早よう6時です」
　　月曜から金曜日　午前6時から7時に放送されていた。

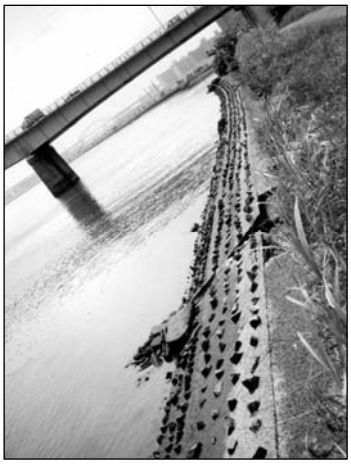
≪川岸の状況≫

（文と写真　高原光雄）

昔の川岸は玉石などを斜めに積み上げ、石の間をコンクリートで固めて護岸されていた。

その川岸が昭和25年ころから井戸による地下水の汲み上げのために地盤沈下が始まって、昔の川岸は現在の川岸の地下約2mに埋没している。（国土交通省荒川下流河川事務所調べ）

現在、昔の護岸がただひとつ残っている場所は鹿浜橋下の上流右岸ゴルフコース沿いにある。



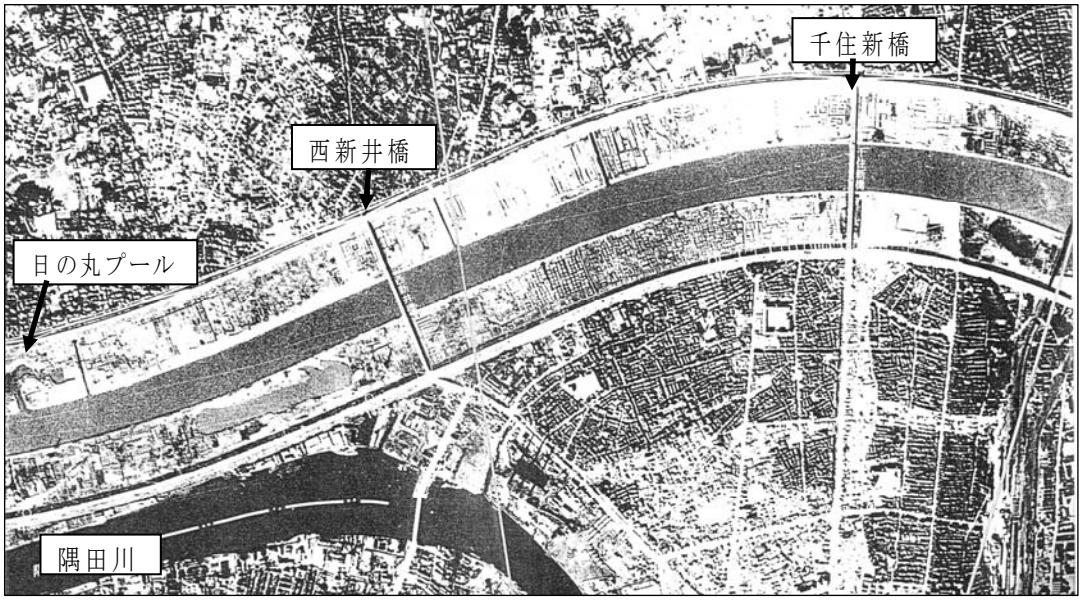
撮影日：
平成16年8月20日

終戦直後の河川敷

≪終戦直後の河川敷≫　　（文　高原光雄）

昭和20年の秋、私は戦争中に[注1]集団疎開をしていた長野県の善光寺から戦争で焼け野原になった足立区内の自宅に帰り、焼け跡に残った倉庫で親といっしょに暮らした。家は荒川放水路の左岸側の旧日光街道沿いで、土手からはお化け煙突が3本に見え、映画「煙突が見える場所」(昭和28年五所平之助監督)のロケ地の近くだった。

左岸側の河川敷は千住新橋を挟んで下流は鉄橋まで葦の原で土手のすぐ下まで水が溜っていた。一方、上流は西新井橋の先まで[注2]食料増産のために田んぼや畑が作られていた。その田んぼの細い[注3]畦道をすべりながら歩いて川岸へ出たが、3から4年後には田畑を耕す人が全くなくなり、河川敷いちめんに葦が生い茂って畦道が分らなくなった。



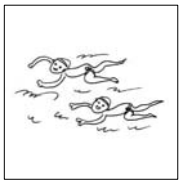
葦の原と田畑、昭和22年アメリカ空軍撮影の航空写真
提供：荒川知水資料館

夏休みに入ると私は近所の友達といっしょに川へ行って釣りをしたり泳いだりボートに乗ったりして、午前中から夕方になるまで遊び昼飯を食べないことが多かった。そのころ遊びに夢中になっていた

私は正午に鳴るサイレンを聞いたとたん身体が固まったことを覚えている。それは戦争中に聞いた空襲警報のサイレンで、恐ろしいと身体が拒否した反応だった。いっしゅの[注4]トラウマであったが、その拒否反応は4～5年後に正午のサイレンが中止になるまで続いた。

注1:小学生が敵の飛行機の爆撃や火災でけがをしないために安全な地方へ学校ごとに集団で移り生活をした。足立区内の小学生は長野市にある善光寺の宿坊に別れて移った。
注2:戦争をしていたので食料などを外国から輸入できず食べ物が不足したため、各家庭で庭に畑を作ったり、公園や河川敷で田や畑を耕して食べ物を得ていた。
注3:畦道は水田をしきった道で人が通れる50cmくらいの通路。
注4:トラウマは子どもの時に受けた恐怖の体験が刺激として残り、同じような刺激を受けると拒否反応をおこす現象。

河川敷総合グラウンド



≪連合運動会≫　　（文　石坂　満）

戦前の荒川放水路、千住新橋を草加方面に向かって左側、荒川右岸河川敷が区内唯一の総合グラウンドだった。区内の小学校の秋季運動会が終わると上級生（6年生）の話題は区の連合運動会の優勝旗を持って帰るのは、どこの小学校だろうと予想の話題に花が咲くくらい人気があった。種目は団体、個人とあり、100m、1000mの徒競走、400mリレー、走り高跳び、巾跳びなどいろいろとあった。当時（昭和10年ごろ）、区内には小学校は19校（区教育委員会調べ）があり、それぞれ各校に得意の種目があった。

区内各地区での他校試合での成績を参考に予想するのも楽しみだった。運動会も各校それぞれ独得の応援歌や応援団の応援振りが面白く、戦前の小学校の最大のイベントだった。私は専ら応援に一生懸命だった。戦前の千住新橋は車道、人道の境界はなく、橋上の見物人が黒山になったが、交通渋滞もなく、のんびりしたものだった。

言葉のページ

《足立の方言》
母：あーや、おっかちゃん、かあちゃん、おっかあ
父：とっちゃん、おとっちゃん
兄：あんちゃ、あんにー、にーに、あにー
姉：ねえちゃん　自分：おれ、おいら、おら
返事などは、「ハイ」とは、言わなかった。
　おーお、あー、えー、うん
蛙：げえる、かいる　御飯：まんま　牛乳：ぬりき
キャベツ：玉菜　玉蜀黍：とんもろこし　大根：でーこ、でえこん
人参：ねんじん　籾殻：すこも　杖：つえんぼ
急須：きびしょ　額：おでこ　頬：ほっぺた、ほっぺ
結ぶ：いわく　小さい：ちっぽけ　夕方：よんべ、ゆんべ
（文　三木美代子）

河川用語	遊びの中の言葉
・河川敷（かせんしき・かせんじき） 川沿いの水が無くて、砂、石の多い平地のこと ・土手、堤、堤防 川などの水が、あふれないように土や石、コンクリートを高く盛った所 ・放水路 台風や大水により、川が氾濫する災害を防ぐため、人工的に造った水路 ・川の右岸、左岸 土手、河川敷の方向についていろいろな言い方があるが、河口、下流に向かって右側を右岸、左側を左岸という。	・かいぼり（掻掘） 川、池、沼などの水を汲み出して干し、中の魚を捕ること。換掘、換乾とも言う。 ・四つ手網 四隅を竹で張り拡げた四角の網で、水底に沈め、ときどき引き上げて、入った魚を捕る漁法。 ・ぶっ込み（打込み） 浮きをつけず、おもりをつけて投げ込み、水中に餌をうかせて行う魚釣法。 ・野焼 春に草花が良く生えるようにするために、早春に枯草を焼くことで、後に残った灰が肥料となる。

足立区、荒川(放水路)の歴史

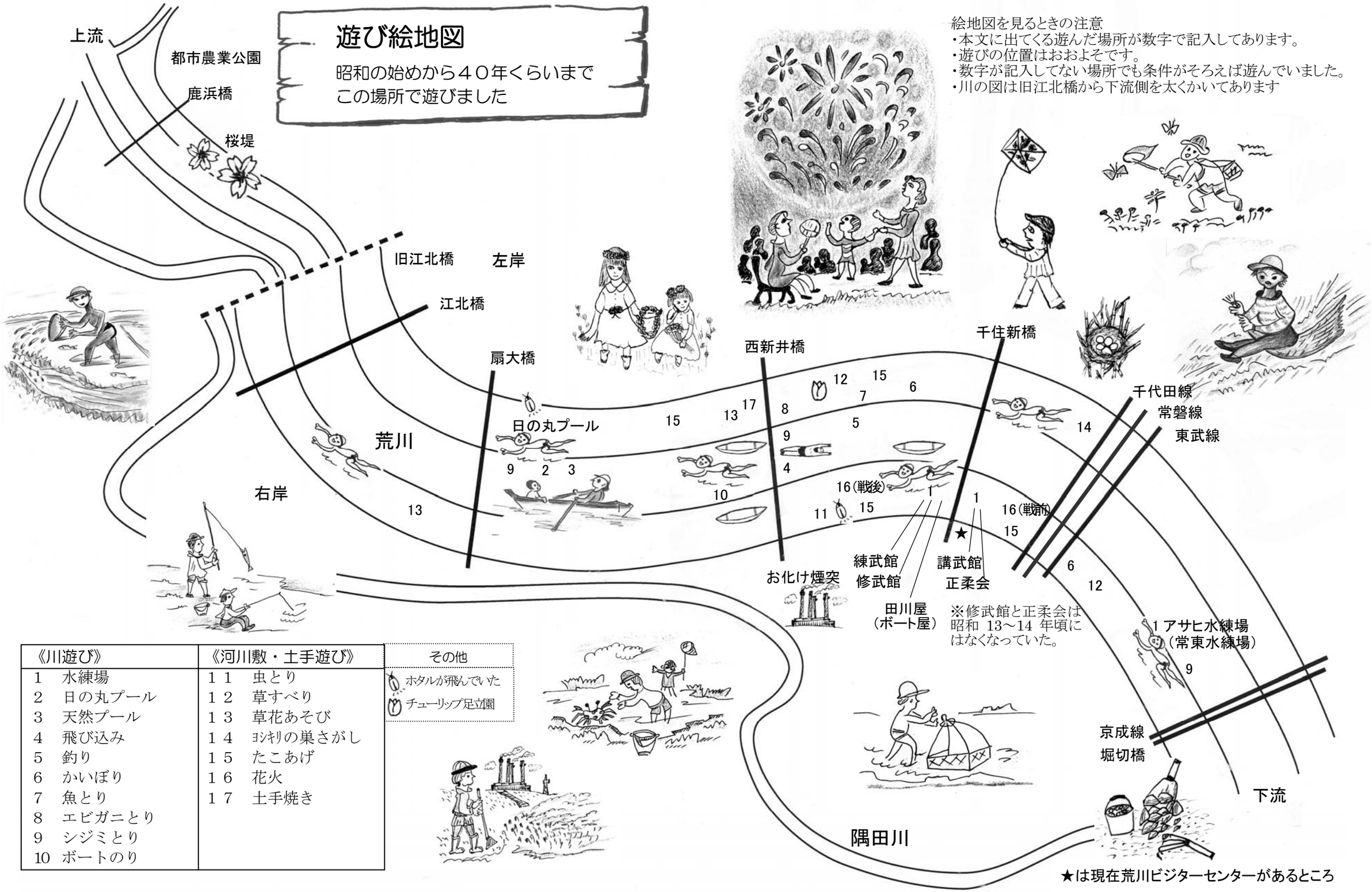
西暦	年号	できごと
1910	明治43年	関東地方に大雨、南足立郡全体に大水害 荒川放水路、改修計画おこる。 (下町の大商人が自宅を港区、品川区の 高台へ移す動きが、盛んになる)。
1911	明治44年	荒川放水路着工
1912	明治45年	五色桜、アメリカ、ワシントン市へ寄贈
1914	大正 3年	第一次世界大戦始まる (1917年に終わる)
1921	大正10年	(農地の宅地化拡大する)
1922	大正11年	西新井橋完成
1923	大正12年	9月1日　関東大震災発生 (死者91802人、行方不明42257人と発表) 南足立郡の被害:死者89名、負傷者218名 行方不明9名、家屋全半崩壊2628戸
1924	大正13年	岩淵水門完成、荒川放水路全線に通水 6月20日　千住新橋完成 8月13日　「千住新橋完成記念」花火大会
1925	大正14年	江北橋完成 東京放送局がラジオの試験放送を開始
1926	大正15年	東京電燈(現東京電力)の千住火力発電所完成 (お化け煙突)
1930	昭和 5年	荒川放水路完成
1932	昭和 7年	足立区設立(市郡併合により東京市域が、拡大 南足立郡の3町(千住町、西新井町、梅島町)と 7ヶ村(綾瀬村、東渕江村、花畑村、渕江村、 伊興村、舎人村、江北村)が足立区となる。
1939	昭和14年	「千住の花火大会」戦争のため中止となる。 河川敷にチューリップ足立園開園、評判になる
1941	昭和16年	12月8日　太平洋戦争始まる この頃から荒川放水路河川敷農地化
1945	昭和20年	東京大空襲、3月10日、4月13、14日 8月、広島、長崎に原爆投下 8月15日　太平洋戦争終わる
1946	昭和21年	11月3日　日本国憲法公布
1948	昭和23年	3月31日　荒川堤防敷地での耕作禁止となる
1949	昭和24年	8月13日　千住の花火大会復活
1953	昭和28年	2月1日　NHKテレビ放送開始 8月28日　民放テレビ放送開始
1961	昭和36年	6月1日　西新井橋近代橋完成 10月「足立区納涼大会」は区民芸能大会 として、秋に開催となった。 (花火大会は前年から中止)
1964	昭和39年	10月10日　オリンピック東京大会開催
1965	昭和40年	2月12日　新神谷橋と鹿浜橋が、片側だけ完成して 開通。 環状七号線が足立区に入った。 この年施行の新河川法により「荒川放水路」から 「一級河川荒川」となり、岩淵水門から下流の 旧荒川を隅田川とした。
1966	昭和41年	6月21日　江北橋近代橋完成
1968	昭和43年	5月10日　環七鹿浜橋完成
1970	昭和45年	「水質汚濁防止法」制定。汚濁発生源の規制がなされ 荒川の水質が大幅に改善するきっかけとなる。

参考資料:
「足立区近代史年表」 足立区役所編、発行 1973年3月25日
「足立の歴史 改訂版」 足立区役所編、発行 1990年3月31日
「都市を往く荒川下流」 荒川下流工事事務所発行 1997年3月
「新版 荒川放水路物語」 絹田幸恵著 新草出版 1992年2月20日
「荒川下流75年の流れ」 荒川下流工事事務所発行
「足立区史」上巻、下巻 足立区役所編、発行 1967年11月
「足立の今昔」 足立区役所編、発行 1979年3月1日
「写真で見る足立区40年のあゆみ」 足立区役所編、発行 1972年10月

遊び絵地図

昭和の始めから４０年くらいまで
この場所で遊びました

絵地図を見るときの注意
・本文に出てくる遊んだ場所が数字で記入してあります。
・遊びの位置はおおよそです。
・数字が記入してない場所でも条件がそろえば遊んでいました。
・川の図は旧江北橋から下流側を太くかいてあります



《川遊び》	《河川敷・土手遊び》
1　水練場	１１　虫とり
2　日の丸プール	１２　草すべり
3　天然プール	１３　草花あそび
4　飛び込み	１４　ヨシキリの巣さがし
5　釣り	１５　たこあげ
6　かいぼり	１６　花火
7　魚とり	１７　土手焼き
8　エビガニとり	
9　シジミとり	
10　ボートのり	

その他
ホタルが飛んでいた
チューリップ足立園

2004年２月８日

荒川の昔を伝える会発足

足立の荒川を知りたい、伝えたい人集合！

●郷土写真家でもある石坂さんが50年撮り続けた荒川のスライドショーとお話し

●自己紹介と思い出の交換会。小菅の渡しに乗ったことなど、話に花が咲く。

↓

３月

荒川の昔の記憶を整理

●伝えたいこと、知りたいことはなんですか？
→伝えたいことが一番多く挙がった
「遊び」を最初のテーマに決定！

↓

３月～４月

遊びの記憶を整理

●昭和初期、20年代、30年代のグループに分かれて記憶を整理していきます。

遊びを年表で整理

●遊びの名前、場所、方法はどのようなものだったかをグループ毎に整理
→記憶の裏づけに必要な項目を挙げる。
・ボートはいくらで乗れたの？
・草花遊びをした植物の名前は何？

↓

５～８月

記憶を裏づけする

●調べたものをつけ合わせて事実確認
記憶を裏づけして、各年代の遊び毎にまとめる

調べましょう！

ーこうやって調べましたー
・こんな風に
「千住新橋近くにあったボート屋の名前は？」
「当時の写真を見てみましょう」ルーペで見ると・・・「田川屋だ！船の旗に書いてある」
・他には・・・聞き込み、資料を読む、荒川知水資料館に聞く　など

●記憶と調べたことをまとめて意見交換

「水練場に浮かべた伝馬船の動力は何ですか」と昭和初期チームに質問。「長い竿を持って、川底にさして船を歩いて進めたんだよ」と、身振り手振りで回答。

質問や意見が調べる材料になり、内容が充実しました！

質問は来ているかな？

お答えします！

↓

●編集委員決まる！
編集方針や本の構成を決めます。みんなの意見を反映させる大役。

9月～１１月

原稿作成

●原稿作りの視点
裏づけした記憶を文章に。
当時感じたことや使っていた言葉も大切に。

●原稿へ意見を交換
「トーセミトンボって？」読み手の視点で知りたいことを書く。質問の答えを原稿に入れて、内容を豊かにしました。

↓

１１月～２月

班に分かれて本の仕上げ

●編集委員は校正　文体を統一させたり、4年生以上が読みやすいようにルビ振りなど、この本での校正基準を決めて作業をしました。

●表紙作成、写真ページ作成、資料作成、パソコン入力、イラスト描き。それぞれの得意なこと、興味があることが生かされて作業は進む。

「この写真がいいじゃない」

↓

「ここ直してください」
修正意見は編集委員が対応

●今までの作業が１冊の仮の本にまとまる！
みんなで内容を読んで意見交換。読んでくれる人の視点にたった意見や見やすくする工夫の意見もでました。

→

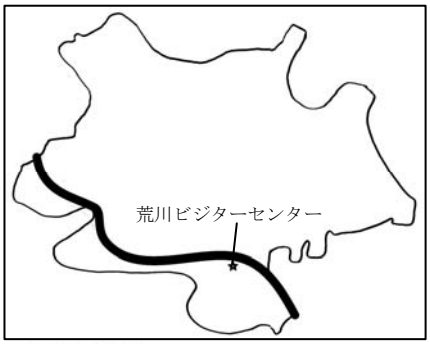
2005年3月

「荒川の昔ー遊びー」完成！

参考資料

《書籍》
「新版　荒川放水路物語」　絹田幸恵著　新草出版　1992年2月20日
「足立区近代史年表」　足立区役所編、発行　1973年3月25日
「足立区史」上巻、下巻　足立区役所編、発行　1967年11月
「足立の歴史　改訂版」　足立区役所編、発行　1990年3月31日
「足立風土記稿　地区編1千住」足立区立郷土博物館編　足立区教育委員会　2004年3月1日
「足立風土記稿　地区編2西新井」足立区立郷土博物館編　足立区教育委員会　1999年3月
「足立の今昔」　足立区役所編、発行　1979年3月1日
「写真で見る足立区40年のあゆみ」　足立区役所編、発行　1972年10月
「足立区教育百年のあゆみ」　足立区教育委員会　1980年2月20日
「創立60周年記念誌」寺地小学校記念誌編集委員会編　足立区立寺地小学校　2000年11月18日
「1964体協のあゆみ」　足立区体育協会編
「葦立ち恋風　新・千住ものがたり」　宮城春彦著　今日のアジア社出版局　1981年12月
「日光街道千住宿民俗誌　宿場町の近代生活」　佐々木勝、美智子著　名著出版　1985年10月25日
「荒川下流75年の流れ」　荒川下流工事事務所発行
「とびだせ荒川たんけん隊」　荒川百科編集委員会発行　1998年2月
「まわってめぐってみんなの荒川」　野村圭佑編・著　あらかわ学会発行　2000年6月
「荒川ワンダーランド」　井出隆雄著　イーノ　2001年3月10日
「お化け煙突と少年たち　いじめ朝吉の正義と犠牲」　白沢実著　伝達文春販売センター
「ふるさとの遊び　春・夏編　水谷京司著　日本教育新聞社　1988年2月
「江戸凧絵史」　斉藤忠夫著　グラフィック社　1980年10月
「ザリガニはなぜハサミをふるうのか」　山口恒夫著　中央公論新社　2000年7月25日

《新聞、雑誌、パンフレット》
「都市を往く荒川下流」　建設省荒川下流工事事務所　1997年3月
「ARA　2003年7月号」　ARA編集部（㈱オフィスサンサーラ）
「荒川下流の水質」　荒川下流河川事務所
「荒川わくわくブック」　荒川下流工事事務所
「時代と供に名称、定義が変わっても人の心を捉えて離さない隅田川」
　2000年7月30日号　読売新聞夕刊
「ときめき　2004年5月15日（244号）、7月15日（248号）」　足立区公社等連絡協議会
「あだち広報　7月25日（第1410号）　足立の花火」　足立区
「第26回足立の花火大会プログラム」（新聞ちらし）　足立観光協会
「足立史談　第139号　荒川の夜空を彩る3千7百発」　関根光治著　足立区教育委員会



荒川の昔
―遊び―

荒川の昔を
伝える会会員
（荒川とのおつきあい年数順、敬称略）

石坂　　満
湯田　雛子
木村　知義
三木美代子
関根　ノブ
吉田千伊知
斉木　武弥
熊岡　健三
桑山　恵右
阿部　　孝
髙原　光雄
石井　清弘
國谷　　崇
小林　啓子
吉田　昭三
坂田　佳久
中村　光明
則竹　秀子
滝口　輝男
遠藤　　浩

寄稿
頼住　憲一

編集後記

荒川に水が集うごとく「荒川の昔を伝えよう」と多くの人が集まり、「昔、川で泳いだ。」「河川敷で魚をとり、草をつんだ。」などたくさん語り合いました。これを今の人に伝えようと昭和初期、第２次大戦後、高度経済成長期の３班に分け、各年代ごとの遊びをこの冊子にまとめたわけです。荒川放水路が通水して８０年、この間の思い出を皆さんにお届けします。荒川の流れがいつまでも続くように、荒川の思い出、いつまでも。

（滝口輝男）

発行日　2005 年 3 月 1 日
発行　足立区荒川ビジターセンター
編集　荒川の昔を伝える会
〒120-0034
足立区千住 5-13-5
学びピア 21 内 4 階
Tel　03-5813-3753
Fax　03-3870-8544
E-mail　ara-vc@adachi.ne.jp
http://www.adachi.ne.jp/users/ara-vc

カット　荒川の昔を伝える会会員
Ｙ・Ｓ表記は坂田　佳久
編集　遠藤　浩　桑山　恵右
小林　啓子　滝口　輝男
中村　光明　則竹　秀子
編集サポーター
國谷　崇　斉木　武弥
髙原　光雄　吉田　昭三
荒川ビジターセンタースタッフ
浅羽　純一　大武　昭雄
熊谷　梓　作田未知子
関根　雅史　山下　美晴

写真提供　石坂満氏
昭和五十六年　千住新橋上流左岸
約二百メートルより富士山を望む

「荒川の昔　遊び」
発行　足立区荒川ビジタセンター
編集　荒川の昔を伝える会